カントの二律背反論

河　村　克　俊

1.0　はじめに

「概念史的方法」による手堅い研究で知られるノルベルト・ヒンスケによれば、「アンチノミー Antinomie」は刊行された著書に限るならば『純粋理性批判』に初めてみられるタームであり、その後二つの批判書で用いられることでカントの思索を特徴付けることになった用語の一つである[1)]。『純粋理性批判』にみられるカントの「アンチノミー」は、互いに背反しあう二つのテーゼを提示し双方の観点を論証した後、最終的にそのどちらか一方を真理とみなす、というプロセスを担うものではない。そうではなく、「定立」と「反定立」の両者が共に依って立つ前提を明らかにし、その前提のうちにみられる誤謬に気づくことで、それまでいわば隠されていた真理を発見しようとする。ここでの誤謬とは、カントによれば私たちの基本的なものの見方のうちに既に組み込まれている観点に他ならない。そしてヒンスケによれば「アンチノミー」は、この誤謬を明らかにすることで隠蔽されていた真理を提示しようとする一種の哲学的方法である。私たちに認識可能な領域を感性界に限定し、悟性による単独での認識可能性を否定するとともに、感性界に現われるもののもとにあってそれ自身現象することのないものを物自体として想定するカント独自の観念論の生成と、方法としての「アンチノミー」とは、密接な関係のうちにあった。換言すれば相互に矛盾対立する二つの命題を並置し、これについて吟味することを

1）Norbert Hinske, Kants Begriff der Antinomie und die Etappen seiner Ausarbeitung, in: *Kant-Studien* 56（1966）, S. 485-496, insbes. S. 486.

通じて、私たちの基本的なものの見方のうちにあって長らく気づかれることのなかった先入観ないし誤謬を発見し、これを解決する視点から新たな世界観が提示されることになったわけである。

また『純粋理性批判』での「アンチノミー」は、事象の全体を意味する「世界」という概念と密接に関わっている。私たちは諸々の事象の総体として「世界」を把握しようとするとき、そこに何らかの「限界」を認め、世界を閉じたものと見なすのか、それともそこに何らの「限界」も認めず、これを限りなき拡がりと見なすのかという二つの選択肢の前に立たされることになる。また後に見るように、「世界」を生成し続ける事象の全体として把握しようとするとき、そこに何らかの「第一原因」を認めることができるのか、それともすべては原因と結果の連鎖であり、何ものの結果でもない端的な「第一原因」は認めることができないのか、という互いに矛盾し合う二つの世界像を前にすることになる。限界を認める立場もこれを認めない立場も自らの正当性を同等の論証力によって主張し、同様に相手の主張のうちに矛盾を指摘することができるので、ここで私たちは容易にどちらか一方を選ぶということができない。このような二つの世界観が純粋理性の二律背反論で提示されている。そして、結果から見るならばこの二つの世界観を調停しようとする思索を通じて、カント固有の世界観である超越論的観念論が生成することになったと言える。

1.1　ノルベルト・ヒンスケによる「アンチノミー」[2)]の定義と三段階説

批判期の著書に繰り返し用いられている「アンチノミー」というタームは、

2）ツェードラーの『万有事典』には「アンチノミア Antinomia、[…]諸法則の敵対。すなわちもし二つの法則が互いに反対するか、またそれどころか相互に矛盾するならば」それがアンチノミアであると述べられている。(Johann Heinrich Zedler, *Grosses vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste* [...] (UL), Bd. 2, Halle u. Leipzig 1732, Sp. 572); vgl. Hinske, *Kants Weg zur Transzendentalphilosophie. Der dreißigjährig Kant*, Stuttgart u. a. 1970 S. 102f., Anm. 346. また、ヒンスケによればバウムガルテンの遺稿『一般哲学』(Philosophia generalis, hrsg. von J. Chr. Foerster, Halle 1770, S. 95）で、自然法と民法の間にみられる矛盾関係が「アンチノミー」として論じられている以外には、当時の哲学

先に触れたように前批判期の著書にはみることができない。したがって、その先行史を探求するためにはインデックスを用いてこのタームを調べるという方法は採れず、その内容からみて二律背反に相当する思索の跡を前批判期の著書、カント自身が授業に用いた教科書の手択本の欄外に記されたメモ書き遺稿、講義の筆記録等のうちに読みとることが求められることになる。「アンチノミー」についてのカントの思索の進展を跡付けるためには、これが何を意味するのかを定義し、その定義に基づいて「アンチノミー」の思索を上記資料のうちに辿ることが求められるわけである。

N. ヒンスケによれば、この「アンチノミー」というタームをカントは少なくとも三つの意味で用いている。先ず、(1)「法則相互の矛盾」[3]である。この意味での「アンチノミー」は、『純粋理性批判』では理性法則相互の矛盾として提示される。次に (2)「ふたつの陳述間の矛盾」[4]であり、互いに背反する論述というほどの意味をもつ。この意味での二律背反論は、「反定立論 Antithetik」というタームのもとにカトリックとプロテスタントの教義の対立点を二つのテーゼとして対照し提示するプロテスタントの「論争神学」の方法に由来する[5]。そして (3)「理性自身の状態」である[6]。ここでは、「定立」と「反定立」を双方共に理性に基づく命題として洞察する理性自身のあり方が意

関連文献に「アンチノミー」という用語はみられない。以下を参照。Hinske, *Kants Weg,* ibid., S. 100, Anm. 332.

3) Hinske, Artikel „Antinomie“ in: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, hrsg. von Joachim Ritter, Bd. 1, Darmstadt 1971, Sp. 393f.

4) Ibid.

5) 以下を参照。Hinske, Kants Begriff der Antithetik und seine Herkunft aus der protestantischen Kontroverstheologie des 17. Und 18. Jahrhunderts. Über eine unbemerkt gebliebene Quelle der Kantischen Antinomienlehre, in: *Archiv für Begriffsgeschichte 16*, 1972, S. 48-59. 拙訳、ノルベルト・ヒンスケ「カントに於ける矛盾論の概念と、その十七、十八世紀プロテスタント論争神学からの由来—カント二律背反論の未だ気づかれざる起源について—」『関西学院大学哲学研究年報第34輯』2000年、pp. 91-111。

6) Hinske, *Kants Weg*, ibid., S. 102-104. カント自身次のように述べている。「…このような弁証的推理における理性の状態を私は二律背反と名付ける」(KrV B 398)。

味されている。ヒンスケによれば、カントは第一と第三の意味で用いる際には単数形を、第二の場合には複数形を用いている[7)]。

またヒンスケは、前批判期からこの用語が明確に現われる1781年に至る発展史のうちに、互いに矛盾するテーゼや原理についてのカントの思索を省察し、そこに三つの段階を認めている。第一の段階は、「テーゼ」と「アンチテーゼ」の双方が共に正当であり真であると証明できるような外観をもつふたつの**命題相互の衝突**として特徴付けられる。この段階での「際立った表現」(KW 102f.)は、「1755/56年の著書のうちに」(ibid.)みられる。この第一の段階で衝突するのは、まだ二つの命題であり、二つの陳述である(ibid.)。そして「二律背反」をめぐる思索の第二段階では、人間の認識能力のもつ複数の**法則相互の争い**が問題となる[8)]。ヒンスケによれば『就職論文』(1770)にみられる悟性の法則と感性の法則の対立がこの段階を示している。すなわち、そこにみられる「論証的である悟性ならびに理性の法則」(KW 109)と、「直観的な認識の法則」(ibid.)の対立が、批判期の概念である「アンチノミー」論の前史を形成している。この「悟性の法則」と「直観的認識の法則」の対立は、次の第三段階で、変容しつつ、背反する二つのテーゼの根底にあり続けていると考えられる。つまり事象連鎖の系列に端的な第一の項を認めない「アンチテーゼ」は「直観的な認識の法則」に対応しており、空間的時間的に検証することのできる第一項をのみ認める立場に重なると言えるだろう。そして原理上感性界には固定的な限界がなく、したがって端的な始まりや終わりは存在しない。そこではすべてが連続しており、いかなる間隙もなく、ただ相対的な始まりや終わりがあるだけである。後に見るように第二段階での「直観的認識の法則」が第三段階での「アンチテーゼ」すなわち空間・時間、物体の分割に限界を認めない立場へと変容したと考えられる。いずれにしても『就職論文』には未だ「アンチノミー」というタームは見られない。そして認識能力のもつ法則相互の対立は、『就職

7) Hinske, Artikel „Antinomie“ in: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, hrsg. von Joachim Ritter, Bd. 1, Darmstadt 1971, Sp. 393f.

8) 以下を参照。Hinske, *Kants Weg*, S. 109.

論文』の刊行される1770年以降[9]にさらに周到に吟味されることで次の段階に至るというのが、ハイムゼートやヒンスケの解釈である[10]。そして第三の、批判期の段階での「アンチノミー」の特徴が、**理性法則相互の矛盾**であり、またこの矛盾を自らのうちにもつ理性自身の状態である[11]。

第一の段階に属する『新解明』（1755）には、自由概念をめぐる二つの解釈の間の論争がみられ、そこに対立する二つの立場による互いに否定しあう命題をみることができる。このテクストでは、経験世界の成立する条件として「充足根拠律」がその基層に置かれ、あらゆる事象生起がこの原理によって制約されていると見なされ、最終的にはライプニッツやヴォルフと同様「理性に基づく自発性」が自由であるという立場が採られている。すなわち自らに先行する位置に何らかの決定根拠をもち、またその意味で相対的であると言える自発性が、本来の自由概念だという立場である。この時期のカントは「充足根拠律」の制限なき妥当性を前提に事象連鎖の総体として世界を理解しており、その限り何らかの充足根拠に基づくことが、自由な行為ないし選択にとっても不可避

9）Heinz Hiemsoeth, Atom, Seele, Monade. Historische Ursprünge und Hintergründe von Kants Antinomie der Teilung, in: ders., *Studien zur Philosophie Immanuel Kants II*, Bonn 1970, S. 137.

10）以下を参照。*Kants Weg*, S. 107–110.

11）このアンチノミーの発展的三段階説に対してローター・クライメンダールは異議を唱えている。彼は第二段階を『就職論文』（1770）にみられる認識能力のもつ法則相互の対立のうちにみるヒンスケに対し、いわゆる「69年の大きな光」のうちに、アンチノミーとその解決案が含まれるとみなす。したがって三段階説は変更を迫られるというものである。ヒンスケはハイムゼートとともに、70年代にはいってようやく理性そのもののうちなるアンチノミーという問題が形成されていくという立場を採り、『就職論文』に第二段階を位置づけている。これに対しクライメンダールはアロイス・リールとベンノ・エルトマンにしたがい、69年にすでにアンチノミーがいわば仕上がっているとみなす。「…リールとエルトマンによれば、1769年の大きな光は空間と時間の主観性の発見ということが要点であり、それはアンチノミーによってもたらされた。…このような理由から第三段階への到達は1769年へと前倒しされねばならない」（Lothar Kreimendahl, *Kant – Der Durchbruch von 1769*, Köln 1990, S. 156ff. insbes., S. 157）。クライメンダール説を採るならば、なぜアンチノミーの問題が70年論文で純粋理性のもつ法則相互の矛盾として明確に主題化されていないのかということが問われるだろう。

の前提となる。しかし、このテクストを丹念に読むならば、特にこのテーマに関して後半部に置かれている架空の論者によって両方の立場からなされる議論では、ヴォルフ的な「自発性の自由」が決定的に優位にあるという論証とともに論争に終止符が打たれていると解釈することはできないだろう。換言すれば、「理性に基づく自発性」が自由であるという命題と、二つの対象から一方を選ぶに際して心のもつ「均衡中立」状態が自由であるという命題の対立は、どちらの主張も同じようにその弱点を批判されており、容易に決着をつけ難い問題として提示されているように思われる。対立する命題を再構成するならば、先ず「理性に基づく自発性」としての自由を認める側の前提が以下のように示される。「物理現象であろうと自由な行為であろうと、いずれにせよ、すべての出来事の確実性は決定されている。後続するものは先行するもののうちにおいて、先行するものはより先行するもののうちにおいて、すでに決定されている」(ND 465)。ここには生起する全ての事象が充足根拠律の制約のもとにあり、先行的な決定根拠をもつという世界観的前提が示されている。この前提のもとで、自由は以下のように定義される。

> 「[…]自発性とは内的原理に基づく行為である。この行為が最善なるものの表象と合致するように決定されているとき、この自発性は自由と言われる」(ND 459)。

「最善なるもの」を提示するのは悟性ないし理性であり、これに自発性が基づくところに自由が成立するので、これは「理性に基づく自発性」と表現できる。これに反対するテーゼは、二つの選択肢を眼前に置く状態から以下のように述べられる。「あらゆる自由な行為において人間は、両方の側に対して中立の態度をとる」(ND 460)。ここでの「中立の態度」は、先行するあらゆる根拠の決定性を制限ないし相対化することを意味する。そこでは決定根拠は一つではなく、二つ(以上)認められる。そして選択は、いまここでまったく新たに「私」の責任で行われることになる。先行する決定根拠の否定ないしこれを中立化することは、「よきもの」の相対化を意味し、そのことで価値の相対化

を遂行すると言える。その主体は、利害に基づき対象を選択する「理性」であるよりも、利害や一切の価値を相対化することのできる「意志」であるだろう。均衡中立の立場は、恐らく理性ないし悟性に対する意志の優位を前提とする[12)]。また、ここに示された均衡中立の自由は、次のようにも表現されている。「[…]本当のところ自由な意欲は、その現存在によって決定されているのであって、その現存在に先立つ諸々の根拠によって先行的に決定されているのではない」(ND 440)。この文の趣旨は、自由な行為は、先行する根拠によってあらかじめ決定されているのではなく、その時点での現存在自身によって決定される、ということである。ここでは、人間が時間の内なる存在者であることが前提されており、どのような意味で時間の内なる因果性の連鎖から人間は独立することができるのか、ということが問題とされている。換言すれば、時間的に先行する状態からの独立は、どのように達成されるのか、またその達成されたことはどのような仕方で確認できるのか、ということが問われている。ここには、連綿と続く決定根拠の連鎖に対する懐疑が認められる。すなわちこの連鎖を遡源し切ったところに想定される第一の根拠である存在者に、現存する世界にみられる災いや悪の根拠を帰することを否定しようとする意志が働いている[13)]。したがってここでの対立する二つの世界観の背景には「弁神論」とい

---

12) 「均衡中立の自由」を真の自由概念であるとみなすクルージウスは、悟性や理性に対して意志が優位にあるという立場をとっている。以下を参照。「意志はどの精神においても支配的な力であり、意志というこの力のゆえに、それ以外のすべての力は手段として存在する。またそれ以外の力は、意志という支配力によって方向付けられ、用いられるという仕方で、意志に服従しなければならない」(Ent § 454, S. 885)。ここでの記述にみる限り、クルージウスは悟性を含む他のすべての能力に対して、意志こそがこれらをすべて統括し用いる支配的能力とみなしている。また「悟性はそれゆえ意志のためにある」(Ent § 454, S. 886) と明記され、「[…]意志はまた悟性に対しても支配的能力であるはずである」(Ent § 454, S. 885) と述べられている。

13) この点については『新解明』での自由概念をめぐる架空の対話のうちに読み取ることができる。以下を参照。「[…]その最終的で決定的な原因がついには神であるところの[…]災いの現存在することは、どのように神の善性ならびに神聖と両立しうるのか？」(ND 463ff.)。

うテーマがあったわけである。翻って考えるならば、この二つの命題の対立を最初の基点としてカントは自由概念を巡る問題についての思索を始めたのであり、その後も長らくこの問題についての省察を続け、最終的に批判期にみられるような概念が形成されることになったわけである。したがって自由概念への反省の脈絡では、「均衡中立の自由」という概念が「理性に基づく自発性」ないし「相対的な自発性」とともにカントの思索にとってその始原のあたりに位置しており、「無制約的な自発性」という『純粋理性批判』での自由概念の生成へと至る思索の最も基層に位置していたと言える。換言すれば「均衡中立の自由」と「理性に基づく自発性」という18世紀ドイツ講壇哲学で論争されていた二つの自由概念が、この課題について省察するカントにとってその原点に位置しており、自由についての思索と新たな概念形成は、この二つの自由概念のもつ哲学史的伝統に連なっているわけである。次に、「二律背反」の「第二段階」についてみることにする。

1.2 「感性の法則」と「悟性の法則」の対立

1770年に執筆された『感性界と叡知界の形式と原理』（以下『就職論文』と略記。）は、正教授就任に伴い提出を求められた論文である。したがって自らの思索が熟し、諸々の課題に対する解答が見出されたという自覚のもとにカントが執筆したものではなく、自らの担当する「論理学」ならびに「形而上学」に関わる論稿を一定期間内に提出しなければならないという外的な事情から執筆を余儀なくされたものに他ならない。執筆にまつわるこのような性格上、その内容については十分な吟味に付すことのできなかった主題も含まれていたわけである[14)]。著書としては「沈黙の十年」をはさんで『純粋理性批判』のすぐ前に位置しており、そこでの複数の問題意識が主著の執筆に至る過程で重要な

14）クラウス・ライヒによれば、カントが論理学ならびに形而上学の正教授に任命されたのは1770年３月31日であり、この論文についての公開討論が同年８月21日に行われているので、この５か月足らずの間に『就職論文』が書かれたことになる。以下を参照。Kraus Reich, Einleitung zu Kant, *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis*, Hamburg 1958, S. VII.

基盤となり出発点となったことについては、既に別の論稿で論じたことがある[15)]。すなわち、この論文で主題化されてはいるが論じ尽くすことのできなかった問題、例えば、存在するものの全体を把握しようとする際に生じる全体性の問題、純粋悟性概念はどのように獲得されるのかという問題、そして現象と現象ではないものの取り違えの問題等が、1781年の主著で解決されるべき重要な課題となった。

『就職論文』は、その内容からみるならば、空間と時間を経験に先立ち経験そのものの可能性を制約する基本原理として、また感性の直観形式として認識主観のうちに位置づけており、『純粋理性批判』と立場を一にしている。その14節では、時間は感官から生じるのではなく感官によって前提されており、どの時間もただ唯一の時間の部分として理解され、時間は直観であり、「時間はそれゆえ感性界の第一の形式的原理である」(De mundi § 14) と見なされる。空間については、それが外的な感覚から抽出されたものではなく、自らのうちに全てを包摂する一つの表象であり、純粋直観であり、あらゆる外的な感覚の基本形式であって、「空間はそれゆえ感性界の絶対的に第一の形式的原理である」(De mundi § 15) と説明される。したがって時間と空間について『就職論文』はすでに批判哲学の観点を示していると言える。他方、この論文が主著と明確に異なるのは、例えば、概念を構成的に使用する悟性と、概念ないし理念を統制的に使用する理性を区別していない点であり、純粋悟性概念が感性の制約から独立に、概念を構成的に使用することで対象認識を行うことができるという立場を否定していない点である。換言すれば、この論文には、感性を介さずに悟性が直接対象へと至り、これを把握することができるという考え方が未だ否定されずに残っている。このような観点のもとに、感性と悟性を区別する脈絡で、カントは以下のように述べている。

---

15) 以下の拙論を参照。「前批判期カントの自由概念 ― 発展史的考察 ―」(関西学院大学法学部外国語研究室『外国語外国文化研究』XVII　2017年 3 月、pp. 47–98, insbes. 70–79)。

「感性は主観の受容性であり、これにより、主観の表象状態が何らかの客観の現前によって特定の仕方で触発されることが可能となる。悟性ないし理性は主観の能力であり、これにより、その固有の性質のゆえに感官のうちへと入ってくることのできないものを表象することができる」(De mundi § 3, A 7)。

ここで感性は、主著の立場と同じく、認識主観に対して現前する客観から触発という仕方で何ものかを受容する能力として理解されている。これに対して悟性は理性と区別されておらず、感性を介することなしに単独で何らかのものを表象することができる能力である。悟性と理性の区別がなされていないことは、概念を構成的に用いることと、これをただ統制的にのみ用いることを区別する観点のなかったことを示している。感性と悟性の違いについては、さらに次のように述べられる。

「感性の対象は感性的である。しかし、悟性によって認識されうるものしか含まないものは、叡知的である」(ibid.)。

このように述べたうえで、前者が、ギリシャ哲学以来伝統的に「フェノメノン」と、後者が「ヌーメノン」と呼ばれることにカントは言及する。「ヌーメノン」とは、現象ならざるもの、感性的直観の客体とならないものであり、批判期には「非感性的直観の客体」(KrV B 307) と呼ばれるものに他ならない。最後の表現についてカントは「ヌーメノンの肯定的な意味」(ibid.) と述べているが、しかしカント自身改めて認めるようにそのような直観は人間のもつものではなく、したがって「ヌーメノン」は私たちにとって具体的な客体とはならない。いずれにしても『就職論文』でのカントは、感性と悟性を截然と区別し、それぞれが互いに異なる対象領域をもちうるとみなし、一方をフェノメノン、他方をヌーメノンの領域と考えている。この点については次のようにも述べられている。

「感性的に認識されたものは、そのものが現象するとおりのものの表象であり、悟性的に認識されたものは[…]、それがあるがままのものの表象である」(De mundi § 4, A 8)。

ここでもまた感性的な認識と悟性による認識の区別が明確に示され、前者ではものの現象が、そして後者ではあるがままのものが、認識されると考えられている。あるがままのものとは、感性の制約を受けておらず、主観との関係性を離れたところでもそうあるはずの「もの」である。これは後年「物自体」と名付けられることになる、人間の認識能力の限界を示す概念に似ている。但し「それがあるがままのものの表象」は、その認識可能性が否定されていないので、「物自体」と同一の概念であるとは言えない。悟性は悟性自身の能力によって感性からは独立に認識を行い、ものの現象ではなくものそのもの、あるがままのものを認識することが可能であると考えるのが『就職論文』でのカントの立場である。このような認識論を前提としつつ、「アンチノミー」の前史に位置づけられる感性の法則と悟性の法則の間の矛盾が示される。

「同位的に置かれたものの無限の系列は、私たちの悟性に制限があるために判明に把握されえないし、また取り違えの誤謬によって不可能であるように思われる。純粋悟性の諸法則 leges intellectus puri にしたがえば、結果したものの系列はすべてこの系列自身の根拠をもつ、すなわち結果したものの系列の遡源は限界 terminus なしにはありえない。しかし感性の諸法則 leges […] sensitivas にしたがえば、同位的に置かれたものの系列はすべてその系列自身の指示することのできる始まりをもつ。これらの命題のうち、後者は系列の可測性を、前者は全体の依存性を含意しているが、誤って同一の命題とみなされている」(De mundi § 28, A 34)。

ここでカントは純粋悟性の法則に基づく命題と、感性の法則に従う命題を同一視することのうちに誤りをみている。純粋悟性の法則によれば、結果したものの系列がその遡源によって必ず限界に、つまり「第一原因」に至ると考えら

れている。これは「第一原因」を事象連鎖の系列の端緒に置くことで、系列を完結させようとする合理論の考え方と一致する。系列それ自身を一つの統一した全体と考え、それに対する根拠を系列の外部に置くわけである。この考え方はまた、主著での「第三、第四アンチノミー」の「定立」の立場に対応するものに他ならない。これに対して「感性の法則」にしたがえば、系列自身の示すことのできる始まり、つまり感性的に対象化することのできる第一項が例外なく見出される。「感性の法則」は感性的に、すなわち空間ならびに時間を通じて対象に関わるので、「始まり」もまた感性的な対象となる。換言すれば「始まり」はここで空間的ならびに時間的に位置づけられうる対象に限られる。後者が系列の「可測性」を含意するとは、この系列がどれ程先へと遡源されようともそのすべての項は感性的な対象であり、この連鎖系列の第一項もまた感性的な対象であって、その第一の項からはじまる系列は測定可能であるということである。別の言い方をすれば、感性的な法則のもとにある系列は、それが「感性の法則」のもとにある限り、その全体が必ず測定されうる。またここでの「同位的に置かれたもの」とは、同論文第二節での説明によれば、「全体に対する補充部分のように相互に関わる」（De mundi § 2, A 4）ものであり、その関わり方は相互的であり、「どの項もが別の項に対して規定的であると同時に規定されている」（ibid.）。それは空間と時間を満たすこの世界にみられる事象であり、そのどれもが別のものを規定しつつ、同時にまた別のものから規定されてもいるような関係にある事象である。これと比較されるのが「従属的に置かれたもの」（ibid.）であり、あるものが一方的に原因であり規定するものであって、別のものは一方的に結果であり規定されているものであるという関係にある。

では、ここでの「誤謬」とは何を意味するのか。誤って同一とみなされているのは、「純粋悟性の法則」にしたがう系列が一つの全体としてある何らかの充足根拠をもち、その根拠に依存すると見なすことと、「感性の法則」に従う系列の遡源全体が測定可能であると見なすことである。前者は悟性に基づく論理的な推論の下す命題であり、あくまでも悟性による思考と論証の次元での考

察である。ここに見られる系列の限界は感性的ではないので、系列の全体を計測することはできない。これに対して後者は、空間的ならびに時間的にその対象領域が拡張されれば必ずそこに先なる新たな原因が現われるような、感性的な次元での反省であり、系列の全体が計測可能である。そして、前者の系列の基礎にある「純粋悟性の法則」が、後者の系列を基礎づける「感性の法則」と区別されずに用いられるならば、前者に従う系列が計測可能であると見なされることになるだろう。これがここでの「誤謬」に他ならない。

『就職論文』では悟性の対象としての世界は「限界」をもち、この「限界」を意味する「第一原因」から始まる一つの系列として考えられている。先に見たようにカントによれば、「感性的に認識されたものは、そのものが現象するとおりのものの表象であり、悟性的に認識されたものは[…]、それがあるがままのものの表象である」(De mundi § 4, A 8)。ここではまだ私たちの認識能力である悟性に限界があるということについては十分に省察されておらず、感性に依存することなく、ないしは感性的領域の限界を超えて、悟性は対象を認識できると考えられている。またこの悟性の対象こそがあるがままのもの、感性的な制約から独立する対象そのものであると見なすことで、悟性による直接的な認識を認める視座が採られている。これは純粋悟性、すなわち感性から独立に働く悟性だけによる認識の可能性を想定し、そこに混ざりもののない対象認識の成立することを仮定するヴォルフに連なる視座である。ヴォルフは、純粋悟性による認識の可能性について、以下のように述べていた。「認識の判明性は悟性に属し、これに対してそれが不明瞭であることは感官と構想力に属するのであるから、もし私たちがまったく判明な認識をもつならば、悟性は感官と構想力から区別されている。これに対して私たちの認識に不明瞭さや曖昧さが認められるならば、その認識は諸々の感官ならびに構想力と一つになっている。第一の場合に悟性は純粋と名付けられ、他方の場合には純粋ではないと言われる」(DM § 282, S. 155)。ヴォルフは悟性が感官ならびに構想力から独立に対象認識を行う可能性についてこのように述べているが、しかしすぐ後の箇所でその可能性を否定する。「私たちの悟性はどのような場合にも完全に純

粋ではない」(DM § 285, S. 156)。したがって悟性だけによる認識活動によって、感性の制約を受ける以前のものそのものを認識することができるとする『就職論文』でのカントの認識論は、ヴォルフのそれとも異なると言える。

1.3　法則相互の矛盾を表現する70年前後のメモ書き遺稿

「アンチノミー」に関する第三の、批判期の段階について見るに先立ち、『就職論文』の執筆と前後して筆記されたと見なされるメモ書き遺稿について考察することにしたい。そこには「理性法則相互の矛盾」と見なすことのできる記述が見られる[16)]。なお、メモ書き遺稿の年代推定については基本的にアカデミー版カント全集の編者であるエーリッヒ・アディッケスにしたがう。ここでカントはものの実在的結合について以下のように記している。「実在的なものの結合について言えばその実質的な原理は諸々の経験であり、その形式的原理は、生起することはすべて何らかの決定根拠をもつ、そして第二に、すべてのことは第一根拠をもつ、である」(Refl. 3928, XVII 350; κ^3 1769)[17)]。ここでの実在的なものについての形式的原理は、以下の二つである。

(1)「生起することは、すべて何らかの決定根拠をもつ」。
(2)「すべてのことは、第一根拠をもつ」。

この両命題について、カントは次のようにコメントしている。「これらの原理は両者とも総合的である。前者は私たちの理性が使用する原理であり、後者は理性の使用に限界をもたらす原理である。前者にしたがって私たちは、それぞれ決定する原因の系列のうちで常により高い根拠に注意を向けており、後者にしたがって私たちは、この系列が限界付けられていることを告白する」(ibid.)。ここでカントは生起する事象の根拠を問い、その根拠の系列が端的

16) なおメモ書き遺稿の年代推定については、基本的にアカデミー版カント全集の編者であるアディッケスにしたがう。
17) 以下を参照。Hinske, *Kants Weg*, S. 107, Anm. 361.

な第一根拠とともに完結するのか、それともこの系列が無限にどこまでも続くのか、という世界の全体に関する問題を主題化している[18)]。そして二つの命題はどちらも総合命題であり、共に私たちの認識を拡張しようとする意図のもとに用いられると見なされている。経験的には事象連鎖の全体は決して与えられないので、認識主体は何らかの原理に基づいてこれに関する判断を下さねばならない。そしてこの拡張的認識が基づく原理そのものが、相互に背反的な二つの命題を提示するわけである。同じメモ書き遺稿には、さらに次のような文が見られる。

> 「始まりをもたない従属的根拠の系列を表象することができないのと同様に、この系列がどのように始まったのかを理解することもできない。それにもかかわらず、生起することはすべて決定根拠をもつという命題、無限の系列を必然化するこの命題は、現実的な結合に関するあらゆる私たちの理性判断の形式の原理である。しかし、従属的な事物のあらゆる系列は、また継起的なすべての系列は始まりをもつ、という命題は、ひとつの総合命題であり、認識の客体を無視するのではなく、むしろ私たちの悟性の限界を無視するものである」(Refl. 3928, XVII 350f.)。

ここでの「理性判断の形式の原理」すなわち、「生起することはすべて決定根拠をもつ」という原理は、その文言ならびに内容から見て、「充足根拠律」を念頭に置いたものに他ならない。この原理はここで「無限の系列を必然化する」と見なされており、主著での「反定立」の思考様式に相当する。これに対してもう一つの命題は、事象連鎖の系列に「始まり」を認める。この命題は、系列に始まりを認めることで遡源を完了させており、先に見た『就職論文』での法則の対立に即してこれを見るならば、「結果したものの遡源は限界なしに

---

18) 両命題についてカントは、論理的結合と区別して、「実在の結合…その質料の原理は経験である」(Refl. 3928, XVII 350) と述べている。この記述から、ここでの主題は論理的整合性に基付く事象の総体ではなく、実在する事象の総体としての世界だと見なすことができる。

はありえない」（De mundi § 28, A 34）とする純粋悟性の法則に対応している。そして、ここではこの始まりを認めることそれ自体が私たちの「悟性の能力の限界」を無視するものだとされる。ここで悟性は『就職論文』での解釈とは異なり、「始まり」すなわち第一根拠にあたるものを認識することができない能力と見なされている。この「限界」は、1781年の立場からみるならば、感性的に対象が与えられうる領域、すなわち直観による所与が現前しうる領域の内と外の境界を意味するだろう。感性的直観すなわち空間的、時間的な広がりの内部に、**事象連鎖の端的な始まり**は見出すことができず、したがって悟性には事象連鎖の系列を絶えずより先なるものへと遡源することが求められ、これを止めることが許されない。カントによれば、悟性は「規則の能力」（KrV A 126）であり、常に規則に従って遡源を続けねばならない。遡源の系列のうちにあって、どの原因もまた常に先行する何ものかの結果である。この立場は先にみた「アンチノミー」の第二段階に照らすならば、「系列自身の指示することのできる始まり」（De mundi § 28, A 34）をもちつつ、空間と時間を拡張することによって常に繰り返しより先なる原因を想定する「感性の法則」（ibid.）にしたがう立場である。

また、私たちが用いる原理の使用に「限界」をもたらすもう一つの原理は、この系列の果てに最終的な第一根拠のあることを指示し、それとともに遡源を完結しようとする。第一根拠ないし第一の作用原因は、自らのうちに自己の存在根拠をもつような存在者、つまり自己原因であり、偶然的ではなく必然的な存在者である。このような特殊な存在者を認めることでだけ、この遡源の系列は完結することになる。換言すれば、このような第一原因を認めなければ、遡源の系列は何処までも続く。以上を纏めるならば、互いに矛盾するここでの二つの命題は両者とも、ヴォルフがあらゆる事象生起に対する例外なき条件であるとみなす「充足根拠律」に基づくものであり、この「充足根拠律」という理性原理がこの矛盾する命題の共通の根の部分に位置している。

改めて以上を纏めるならば次のように言えるだろう。「生起することはすべて決定根拠をもつ」（Refl. 3928）という命題は「無限の系列を必然化」（ibid.）

するのであるから、『純粋理性批判』の二律背反論では「反定立」の命題がこれに相当する。そして、系列の無限化は第一原因の在ることを否定し、すべての原因に対して、さらなる、より先なる原因を要請するので、『就職論文』では空間と時間が拡張される限り常により先なる原因を求める「感性の法則」がこれに対応する。また、「生起することはすべて決定根拠をもつ」という命題はこのメモ書き遺稿では私たちがもつ「理性判断の形式の原理」と言われるので、少なくとも「感性」の原理ではなく、「悟性」ないし「理性」の「原理」であるだろう。ここには『就職論文』に提示された、必ず第一原因という限界をもつ「悟性の法則」と、必ず指示することのできる始まりをもつと同時に空間・時間の拡張されることに即してその始まりをどこまでも遡源しうる「感性の法則」を基礎に、後者が「理性」の法則と見なされ、「反定立」の立場を提示するようになる過程の一つの段階が描かれていると言える。「感性の法則」が「反定立」へと繋がっているわけである。

いずれにしても、『就職論文』執筆以降カントは世界を構成する事象連鎖の系列の「無限背進」についての問題意識を深化させることになり、二つの世界観の提示する矛盾を際立たせることになったと考えられる。

1.4　アンチノミーの第三の段階　― 理性の法則相互の矛盾 ―

「アンチノミー」に関するヒンスケの解釈による第三の、批判期の段階での特徴は先ずそれが「理性法則相互の矛盾」であることにある。ここでは世界の全体ないしその限界について省察するとき理性が複数の法則をもつことが前提とされている。理性の法則に基づき相互に背反する二つの命題は、いずれの側も理性自身の反省的活動ないし原理そのものから生じるものに他ならない。この理性の法則相互の矛盾を、ヒンスケは次のように解釈している。

> 「人間理性は、自らの自発性から生じる相互に対立する二つの法則によって特徴付けられる。すなわち、あらゆる条件付けられたものは無条件的な何かへと遡源する、という法則。そして、どの条件も、また再び条件付けられたものとみなされる、

という法則である」[19]。

理性は一方で、条件付けられたあらゆる事象の連鎖の系列を始原に向けて遡源することで、何ものによっても条件付けられていないもの、無条件的なものへと至ろうとする。そして遡源はこの無条件的なもの、第一原因ないし第一根拠であるものとともに完結することになる。この第一根拠は遡源する系列全体にとっての充足根拠となる。すなわちなぜこの事象連鎖の系列が存在しないのではなく存在するのか、なぜ別様にではなく現にあるような仕方で存在するのかについて説明するための充足根拠を提供するものである。またここでの第一根拠は、自己以外の何ものかによって産み出されたものすなわち偶然的なものが求める最終的な根拠でもあり、それ自身偶然的ではなく必然的であるようなものに他ならない。始原の位置にこのような第一の根拠を置くことでその系列を完結させようとするのが、ここで考察されている一方の理性法則であり原理である。しかし他方で同じ理性は、この無条件的なものを決して許容することができず、さらなる条件をどこまでも問い続けることになる。すなわち理性は何ものかのうちに第一根拠を置いたとしても、この根拠に対するさらなる根拠を求め、無条件的なものに対してそれに先行するさらなる条件を求めることになる[20]。それはまた、秩序ある世界の起源を探求するに際して理性がこの秩序の根拠として要請するものでもあるだろう。ここでの理性の法則とは、伝統的な解釈に即するならば、同一律でも矛盾律でもなく、「充足根拠律」である。

---

19) Hinske, Artikel „Antinomie“ in: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, hrsg. von Joachim Ritter, Bd. 1, Darmstadt 1971, Sp. 394. また、以下のようにも述べられている。「純粋な理論理性の二律背反について最も簡潔に表現しようとするならば、以下のように述べうるだろう。すなわち一方では、条件付けられたものはすべて無条件的なもののうちに根拠をもつ、という法則。そして他方では、経験の領域ではどの条件もまた条件付けられたものとみなされ、そしてさらに背後へと進む、という要請である」(Kants Weg, S. 106)。

20) ここでの遡源のあり方は、結果として空間ならびに時間内での事象連鎖の遡源と同じだと言える。そこでは経験的に確認できる相対的な第一根拠が見いだせるだけであり、その第一根拠に対して常に繰り返しさらなる先行的根拠が求められる。

ヴォルフはこの原理を次のように定義していた。「無から何かが生じることはありえないので、存在するものはすべて、なぜそれが存在するのかということについての十分な理由をもっている。すなわち、なぜあるものが[単に可能的であるにとどまらず]現実となるのかについて理解するための何かが、常にあらねばならない」(DM § 30, S. 17)。この原理は次のようにも表現されている。「すべてのものは、なぜそれが存在するのかについて、根拠をもっている。なぜなら無からは何ものも考えることができないのであるから、存在しうるものはすべて充足根拠（ないし理由）をもたねばならず、この根拠によって私たちはなぜそのものが在らぬのではなく在るのかが理解できるのである」(DL § 4, S. 115)。この理性自身の法則である「充足根拠律」のうちに、互いに矛盾する二つのテーゼをここでカントは読み込んでいる。個々の出来事はそれ自身に先立つ位置に何らかの原因ないし理由をもつ。原因ないし理由をもたないものは存在しない。そして個々の出来事の全体についてもまた、同様に原因ないし理由なしには存在しえないと考えられる。したがって出来事の全体である世界もまた原因ないし理由をもつことになる。「二律背反」する理性自身の法則にはヴォルフやクルージウスなど先行する時代の哲学者が「充足根拠律」という名称のもとで考察していたア・プリオリな原理をその根底に認めることができ、そこに見られる原理のうちなる矛盾にヒンスケはアンチノミーの第三段階を洞察するわけである。

2.0　第三アンチノミー「定立」と「反定立」の背景にある世界観。「宇宙論的自由」の起源

ヴォルフが自由概念を「形而上学」の一部である「経験的心理学」で主題化して以来、ドイツ講壇哲学では自由の問題は一般に「経験的心理学」でとりあげられることになった。講義の筆記録を見る限りカントもまた70年代半ばに至るまで形而上学の枠内では「心理学」で自由概念を論じていた。それではなぜ『純粋理性批判』では「心理学」に相当する「誤謬推理論」ではなく、「宇宙論」

にあたる「二律背反論」で自由概念が論じられたのだろうか。換言すれば、なぜカントは自由の問題を「心理学」から「宇宙論」に移行させたのか。ここではまず、この移行の問題についてこれまでに提示された代表的な解釈を確認しておきたい。あらかじめ見通しを述べておくならば、事象連鎖の系列のうちにありつつ先行する決定根拠から独立する自発性ないし選択意志として人間の自由を構想することになる契機がどこにあったのかということについては、先行研究のうちには必ずしも明快な回答が見られない。ハイムゼートが提示する宇宙の始原に位置する存在者、事象連鎖の第一原因に「自由」を観るという伝統的な世界観のうちには、事象連鎖のうちなる存在者に自由を認めるという観点は見られない。したがって世界のうちなる存在者に先行する決定根拠からの独立を認める観点は、ハイムゼートの述べる「宇宙論的起源」とは異なるところに求めねばならないだろう。この「移行」については後に触れるように当時の講壇哲学のうちに複数のモデルがあったと思われる。

ハイムゼートはカントが自由の問題を「心理学」ではなく「宇宙論」で主題化したことについて「宇宙論的起源」というテーゼを提示する。彼はカント自身の言葉に基づいて、自由の二律背反に関する「定立」と「反定立」[21]とが、古代ギリシャ以来西洋哲学の伝統のうちにあり続ける宇宙生成論の土壌に生じたことを跡付けている。「定立」の自由概念ないし世界の「第一原因」は、ハイムゼートによればアナクサゴラスの「種子（ヌース）」に、またプラトンの「世界建築者（デミウルゴス）」に、そしてアリストテレスの「第一動者」に相当する[22]。これらはすべて世界の進行にあって、プログラムそれ自身としてま

21）「定立」は以下の命題である。「自然法則にしたがう因果性は、そこから世界の現象がすべて導出されるような唯一の因果性ではない。現象を説明するためにはさらに、自由による因果性を想定することが必要である」（KrV B 472 / A 444）。これに対する「反定立」は次の命題である。「自由は存在しない。世界におけるすべてはただ自然の法則にしたがって生じる」（KrV B 473 / A 445）。

22）ハイムゼートは次のように述べている。「今日この［第一動者という］古典的なタームが考察されるとき私たちはいつもアリストテレスの宇宙神学を考えている。［…］カントは［アリストテレスではなく］むしろアナクサゴラスを考えていた ― 始原的発動について独自の宇宙論的原理を ― しかも世界のもつ秩序の起源という意味で

たは建築家として、ないしは起動者として、絶対的に第一のものを意味する。これに対して「反定立」についてハイムゼートはエピクロス[23]の学説に言及する。彼によればカントはエピクロス主義を定立の立場であるプラトン主義に反対する古典的基本型であると見なしている[24]。確かにハイムゼートの述べるように、西洋哲学史のうちにあって「第一原因」の問題は宇宙生成を主題化する脈絡で繰り返しとりあげられてきたテーマである。例えば、世界進行の計画がすべて書き込まれている「悟性」という性格が付与されているアナクサゴラスの「ヌース」について、ゴットシェートは次のように述べている。「彼[アナクサゴラス]は、一つの物質からではなく、似かよった様々な[物質の]部分から、また賢しい精神の作用によって世界の起源について説明することで、彼の先人たちを否定した。そのため彼自身ヌース Noûs つまり悟性というあだ名を与えられた」(EG I. § 5, S. 81)。ハイムゼートの説明は先ず、カントの問題意識が古代ギリシャ以来の伝統に結びついていることを教えてくれる。さらに、近代に入りデカルトから続く哲学的－自然学的考察にあってその基層にある「近代の自然ならびに世界概念のもつ因果機械論」[25]に対するカントの立場を明示

― 求めそして取り入れたことで、[第一動者ないし始原的発動といった概念についての]歴史的優先権はアナクサゴラスがもつ。[…]もちろんアナクサゴラスが『自由による』原因性について語っているわけではない。[…]しかしアナクサゴラスの宇宙論的始まりの原理 ἀρχή、これは運動を始める、そして連続運動を「支配する」原理であり、それ自身無限であり支配的であるのだが、この原理は精神と名付けられる。精神は「心」のうちでもまた支配を行う」(Heinz Heimsoeth, Zum kosmologischen Ursprung der Kantischen Freiheitsantinomie, in: ders., *Studien zur Philosophie Immanuel Kants II* (*Kant-Studien Ergänzungshefte Nr. 100*) Bonn 1970, S. 253f. 世界の始原ならびに個々の主体に活動を開始しこれを支配する「精神」を認める考え方のうちに、確かに第三アンチノミー「定立」の自由概念の雛形を見ることができる。

23) カント自身はエピクロス学派が第一動者を認めていないとみなす。以下を参照。KrV B 460 / A 432. バウムガルテンは、エピクロスないし彼の弟子は神の予知を否定したと述べている。以下を参照。Alexander Gottlieb Baumgarten, *Metaphysica*, Halle ^{4}1757 (^{1}1739), übersetzt hrsg. von Günther Gawlick u. Lothar Kreimendahl, Stuttgart-Bad Cannstatt, 2011, § 975, S. 514.

24) 以下を参照。Heimsoeth, ibid., S. 253, Anm. 15.

25) H. Heimsoeth, *Zum kosmotheologischen Ursprung*, a. a.O. S. 265.

している。ハイムゼートによれば、ライプニッツとニュートンが「第三アンチノミー」の「定立」の側に、そしてスピノザ、ヒューム、プリーストリーが「反定立」の側に、影響を与えている[26)]。

次に、「第三アンチノミー」の「定立」ならびに「反定立」それぞれのモデルを近代以降の世界観のうちに探究するアル-アズムのテーゼを見ることにしたい。アル-アズムによれば「第三アンチノミー」の「定立」には、「第一原因」を自らの外部にもつニュートン＝クラークの「機械的世界観」が対応しており、反定立には、ハイムゼートの解釈とは異なりライプニッツの「普遍的決定論」が対応する[27)]。確かにライプニッツは、この現実世界のうちでは、すべての事象が「充足根拠律」に基づいて決定されていると見なす。しかし世界の起始に複数の可能世界を置くことでこの世界を相対化し、神による選択を認めることでこの世界での出来事について、他でもありえたと考える。すなわち、この世界ではそれぞれの出来事は必然性を持って生じており、個々の出来事は例外なくこの世界を構成する事象連鎖によって決定されている。しかし別の可能世界を想定し、そこにそれぞれの出来事を置いてみるならば、その世界での事象連鎖は現実世界でのそれとは異なりうるので、個々の出来事についてもまた別様でありえたと考えることができる。また、ライプニッツは世界の事象連鎖の始まりの位置に、この連鎖の系列そのものの外部に端的な第一の原因を置き、そこに偶然的なすべての事象の存在根拠をみている[28)]。したがってこの点に留意してライプニッツの世界観を解釈するならば、事象連鎖に関する彼の論旨は少なくとも系列の外部に始原を認めるものであるので、「反定立」の側の論証を

26）Vgl. Heimsoeth, ibid. S. 262f. u. 265.

27）Sadik J. Al-Azm, *The origins of Kants arguments in the antinomies*, Oxford 1972, S. 87ff.「機械的世界観」とは、恐らく世界全体を一つの機械とみなし、そこでのあらゆる作用に決定因を認める観点である。例えばヴォルフは世界について「機械」の比喩を用いて説明している。「…世界はいわば一つの機械である。…機械とは合成された作品であり、その諸々の働きは合成という仕方で基礎付けられている。世界もまた同様に合成されたものであり、その変化は合成によって基礎付けられている」（DM § 557, S. 336f.）。

28）『モナドロジー』37－39節を参照。Mon § 37-39, S. 43.

基礎付けるものと見なすことは誤りであるだろう。

次に、自由問題の「心理学」から「世界論」への移行について考えてみたい。先に触れたように18世紀前半のドイツでは自由概念が一般に「経験的心理学」で主題化されていた。それはヴォルフが自らの「形而上学」でこの概念を「経験的心理学」の脈絡で、理性に基づく自発性、ないし理性の指示する決定根拠に従う選択意志として論じたことを承けて、バウマイスター、バウムガルテン、マイアーといったヴォルフ学派の哲学者たちが一様に自由概念を同じく「経験的心理学」でとりあげていることから確認することができる。またカント自身、1770年代の形而上学講義録を見る限り、自由概念を「経験的」ならびに「合理的」な「心理学」でとりあげていた。それではなぜカントは『純粋理性批判』で「心理学」にあたる「誤謬推理論」ではなく、「宇宙論」にあたる「二律背反論」でこの問題をとりあげたのだろうか。この点について、直接にこの変更に影響を与えたのは、事象連鎖の総体として考えられる世界についての反省の脈絡で繰り返しとりあげられた「無限背進」についての省察であったと思われる。そこでは、一方で事象連鎖の系列が無限に続き、すべてがこの連鎖のうちで決定されていると見なす決定論ないし運命論的な世界観がとられていた。これは、世界を一元的に解釈し、始原をも世界内に置き、この世界での事象連鎖を他ではありえないと見なすことで強い決定論を採る立場である。他方これに反対する立場は、世界を構成する事象連鎖の外部に第一の原因を置き、そこに位置する存在者により複数の可能世界から現実世界が選ばれたと考えることで、個々の事象については、他でもありえたと見なす。一方は世界の始原に向けての「無限背進」を認める立場であり、他方は「第一原因」を系列の外部に置くことでこの「無限背進」を否定する立場である。この二つの世界観が、「形而上学」のうちに位置づけられた「世界論」ないし「宇宙論」で繰り返し論じられている。カントへの直接の影響ということでは、バウムガルテンによる「無限背進」の不可能であることについてのテーゼがまず考えられる。また、彼の弟子マイアーも同様の立場を採り、「無限背進」を否定している。またこの「無限背進」にまつわる対立として、ヴォルフのプロイセン追放を引き起こ

すことになったヴォルフとピエティスト派神学者の論争がその前史をなすと考えられる。この論争は、ヴォルフに『ドイツ語の形而上学』の『別巻』に当たるものを書かせることになり、またピエティスト派神学者やそれ以外の反ヴォルフ主義者にも多数の論争書を書く機会を与えることになった[29)]。特に神学者ヨアヒム・ランゲとヴォルフの間には、質疑応答が記録として残されている。カントはこの論争について直接テクストを通じて吟味し考察することはなかったかも知れないが、間接的に触れる機会はあったと思われる。それはケーニヒスベルクのピエティスムスに関わる。カントが神学を学んだフランツ・アルベルト・シュルツ（1692–1763）は、若い頃ハレ大学でピエティスト派神学者のもとで学ぶとともに、ヴォルフのもとでも哲学を学んでおり、その後神学者としてケーニヒスベルクへ赴任するという経歴をもつ。したがってシュルツはヴォルフとカントをつなぐ位置にいたと言える[30)]。この神学教師を通じてヴォルフのひととなりや、ピエティスト神学者との論争についてカントは知る機会があったのではないか。そしてバウムガルテンやマイアーが「無限背進」について「世界論」で主題化するのは、まさにこの問題についてピエティストとヴォルフの論争があったことがその直接の理由だと思われる。彼らはキリスト教の立場に立っており、この立場から無神論的と見なされうる汎神論の立場を批判する必要に迫られていたはずである。以下では、まず簡潔にこの論争の背景にあり、後にみるように名指しで言及されていたスピノザ自身の「無限背進」についてのテーゼを確認したうえで、ピエティスト派神学者とヴォルフの論争

29）ルードヴィキの『ヴォルフ哲学の歴史』や、ツェードラーの『万有事典』の項目「ヴォルフ哲学」にヴォルフを巡る論争書のリストが掲載されている。Carl Günther Ludovici, *Ausführlicher Entwurf einer vollständigen Historie der Wolffischen Philosophie*, 3 Bde., Leipzig 1738, Neudruck, Hildesheim u. New York 1977, Bd. 2, § 522–739, S. 504–651; Artikel „Wolff“, (UL Bd. 58, Sp. 549–677); Artikel „Wolffische Philosophie“ (UL Bd. 58, Sp. 883–1232).

30）以下を参照。Hinske, Kants Begriff der Antithetik und seine Herkunft aus der protestantischen Kontroverstheologie des 17. und 18. Jahrhunderts. Über eine unbemerkt gebliebene Quelle der Kantischen Antinomienlehre, in: *Archiv für Begriffsgeschichte* 16 (1972), S. 48–59.

を読み、その後バウムガルテンならびにマイアーの「宇宙論」にみられる「無限背進」を否定するテーゼについて見ることにしたい。そのうえで、事象連鎖のうちなる存在者に先行的決定根拠からの独立を認める観点をカントがどのような契機から得たのかについて考察する。

2.1　スピノザの無限背進論

ここでは、ハイムゼートが「アンチテーゼ」の基層に認めるスピノザの世界観について簡潔に見ることにしたい。スピノザは世界に対する「外部」を認めず、したがって第一原因を全体である世界の「内部」に置き、そこへと進む背進を無限であると見なす立場をとる。世界を存在するものの全体であり、他の何ものかの部分ではないものと考えるならば、世界は自らの外部をもたない一個の全体であるだろう。そして、すべてのものは世界の内部にあり、それ自身さらなる原因をもつことのない端的な「第一原因」もまた、その内部にあると見なされる。この「第一原因」を自己原因と考え、そこにすべての事象の生成する唯一の源泉を想定するならば、この源泉から生じる事象連鎖から成る系列以外にはいかなる事象連鎖の系列も考えることができず、この系列である世界だけが唯一可能な世界であることになる。すなわち、この現実世界だけがただ一つの可能世界であり、その事象連鎖を唯一可能なものと見なすことで、決定論的な世界観が成立する。それは、一つの強固な決定論的世界観であり、当時の呼び方にしたがえば運命論である。

主著『幾何学の方法によって論証されたエチカ』に描かれた基本的な世界観は「神」を主題化する第一部に示され、そこにあらゆる事象は「神」の本性の必然性から生成するという基本テーゼが提示されている。すなわち、「神の本性である必然性から、無限に多くのものが無数の仕方で[…]生じなければならない」[31)]。ここでの「神」はそれ自身必然性にしたがう存在者であり、その限

31）Benedictus de Spinoza, *Ethica Ordine Geometrico Demonstrata / Die Ethik mit geometrischer Methode begründet*（SE）, hrsg. von Konrat Blumenstock, Darmstadt 1989, I. Pro. 16, S. 115.

り自らの嗜好にしたがって選択し決定する主体ではない。後に見るように「神」は「自然」と言い換えられており、人格的な存在者、自由意志を持つ存在者とは見なされていない。この点がライプニッツやヴォルフなどの「神」概念と決定的に異なる。この基本的理解に基づいてあらゆる事象の決定性が語られる[32)]。「自然のうちにはまったく偶然は存在せず、すべては神の本性の必然性によって、一定の仕方で存在へと、また作用へと決定されている」(SE I. Pro. 29, S. 131)。では、どのような仕方で全ての事象は必然性をもって結びつき、作用へと決定され、系列をなしつつ進行するのだろうか。

> 「あらゆる個物、また有限であり限定された存在であるすべてのものは、自分と同様に有限であり限定された存在である別の原因から、存在や作用へと決定されることによってはじめて存在することができるし、また作用へと決定されることができる。さらにこの原因もまた同様に有限であって限定された存在である別の原因から、存在や作用へと決定されることなしには、存在することはできないし、作用へと決定されることもできない。このようにして無限に進む」(SE I. Pro. 28, S. 129)。

ここでは、それぞれの個物の原因へ向けての遡源は「無限に進む」と見なされている。これは事象連鎖についてのスピノザの「無限背進」テーゼとみなすことができるだろう。これが運命論ならびに無神論と結びつくものであり、その後世界概念を解釈する脈絡で後続する哲学者により繰り返し批判的に論じら

---

32) この点については以下のようにも語られている。「作用するよう決定されているものは、そのように神によって必然的に決定されている。また神から決定されていないものは、作用するよう自分から決定することができない」(SE I. Pro. 27, S. 129)。あらゆる出来事はそうなるべくしてなったのであり、そうならなかったと想像することはできるけれども、しかし実際には全てが現実にある以外のあり方は決してありえず、それらは必然性をもって生じている、というのがここでのテーゼである。全ての事象について他のあり方、別様であることの可能性がここでは明確に否定されている。これらの定理に基づき、個々の事象や出来事だけでなく、同時にまたその全体である世界ないし自然そのものもまた、決定されていると見なされる。

れることになるテーゼである。個々の事象は、例外なく有限であり限定されたものであり、それ自身の外部に自らのあることの原因をもち、その原因もまた同様に有限であり限定されており、自己の外部に自らの原因をもつという事象連鎖の構図が、ここには明確に描かれている。より先なる原因へ向けての事象連鎖の遡源は、そのうちのどの原因もが限定されており、何か別のより先なる原因をもち、それ自身また結果でもあるような原因に他ならない。そしてこの連鎖の系列は、「無限に in infinitum」進む。ある原因からそれに対してより先なる原因へと「無限に」進むこの進行は、現在から見るならばその原因の方向へと向かっているのであるから、「無限前進」ではなく「無限背進」と表現するほうが事柄そのものには相応しい。ところでこの「無限背進」は何処へと向かっているのか。この背進は、「有限」ではなく、「限定」されてもいないもの、スピノザの語る「自己原因 causa sui」へと向かっている。では、自己原因とはどのようなものなのか。「自己原因とは、その本質が存在を含むもの、換言すれば、その本質が存在するとしか考えられないもののことである」(SE I. Def. I, S. 87)。「自己原因」とは、それ以外のすべてのもの、有限であり限定されたものとは異なる特殊な存在者に他ならない。すなわち、自己の在ることの原因を自己自身のうちにもつものである。これに対して、自己以外のものによって生み出されたものはすべて、その本質が存在を含まない[33]。これは、自己の原因を自己以外の何かのうちにもつ有限な存在者、すなわちこの机や椅子や、「私」を含むすべての存在者である。「自己原因」をスピノザの語る「私たちが神ないし自然と名付ける永遠で無限な存在者」(SE IV. Praefat., S. 383) であると解釈するならば、この存在者はあらゆるものを自らのうちに包摂している[34]と同時に、全てのものに対して「内在的な原因」(SE I. Pro. 18, S.

33)「神によって産み出されたものの本質は、存在を含まない」(SE I. Pro. 24, S. 127)。

34) この点については次のように述べられる。「存在するものは全て神の内にある、そして神なしにはいかなるものも存在できず、また考えることもできない」(SE I. Pro. 15, S. 107)。「存在するものは全て神の内にある、そして神によって考えられねばならない。したがって神は神自身の内にあるすべてのものの原因である」(SE I. Pro. 18, Demo, S. 121)。

121）でもある。そして伝統的な西洋の一神教的な「神」概念とは異なり、「超越的な原因ではない」（SE I. Def. 18, S. 121）。スピノザの語る「神」は、世界の外にあって世界に働きかける「神」ではなく、したがってまた「世界に外在する存在者」ではない。有限なものの次元と無限なものの次元を区別するとしても、この二つの次元を包摂する一つの全体である世界の「外部」に位置づけられる存在者ではない。そうではなくて、この「神」は、世界ないし自然の全体と同一であり、同時にまた世界内のすべての事象にとって「内在的原因」でもあるような存在者である。したがってここにみられるのは、一つの典型的な汎神論である。世界を無限で単一のものと見なし、そのうちなるすべての事象を必然的であって、決して他のあり方が可能であるような偶然的なものではないと考える決定論的世界観、これがスピノザの世界観に他ならない。

2.2　ヴォルフとピエティスト派神学者の論争

スピノザないしスピノザ主義という名称が「運命論」と結びつき、キリスト教と相容れない異端、ないしは危険な思想と見なされていたことについては、既知の事柄に属するだろう。ライプニッツをはじめとする当時の哲学者たちはこのスピノザ的世界観と対峙し、自らがスピノザ主義を採らないことを論証するという課題を担うことになったようである。ライプニッツは自己原因的な存在者と自己以外のものにより産み出されたものの区別に基づき、後者を偶然的な存在者と見なすことでスピノザ的決定論を批判している。ピエティスト派神学者ヨアヒム･ランゲからスピノザ主義者と見なされたヴォルフは、自らの立場がスピノザ主義と異なることを繰り返し説明し論証することを余儀なくされる。ヴォルフがマールブルクへ亡命することになる事件については既に紹介されているので、ここでは簡潔に触れるにとどめたい。1721年にヴォルフが行った「中国人の実践哲学」についての講演が神学者たちから無神論的として糾弾され、その後神学者たちのプロイセン政府への働きかけによってヴォルフは1723年11月、ハレならびにプロイセンを追われ、ヘッセンのマールブルクへ逃れることになる[35)]。この論争で争点の一つとなったのが、世界を構成する事象

連鎖の系列を「無限背進」と見なすことでスピノザと同様の世界観を採るのか、それともこの「無限背進」を採らず、世界の充足根拠である「神」の自由な選択を認め、また人間にも自由裁量権を認めるのか、ということだった。以下では、神学者とヴォルフの質疑応答を収め、事件の翌年に出版された「論争書」をテクストに、両者の対立点を見ることにしたい。

ハレ大学神学部の教授ヨアヒム・ランゲは、大学の同僚であるヴォルフの世界観のうちにスピノザ主義を認め、以下のように批判する。ヴォルフは「原因と結果の連鎖を無限な前進」と見なすが、同様の考え方で「よく知られているようにスピノザとその同類たちが自由と道徳を抹殺したのである。そして第一原因である神の存在を不当にも身近に引き寄せ、この世界のすべての出来事を、終わりのない永遠の連鎖のうちに持ち込んだのである」[36)]。

ここでは「神」が「第一原因」と見なされている。では、その「第一原因」であるものが「不当に」そして「身近に引き寄せ」られた、とはどういうことだろうか。ランゲは「神」を事象連鎖の総体である世界と同じ次元にではなく、世界の外、世界を構成する事象系列の外部に、したがって世界とは異なる次元にその位置をもつと見なしていたと思われる。そうであるならば、「神」を世界の外部に位置づけるのではなく、世界ないし自然と同一視し、存在する事象一般を「神」のうちにあるとみなすことで、「神」を事象一般の世界と同じ次元に引き寄せた、と見なしうるだろう。換言すれば、人間とは異なる次元に存在するはずの聖なる存在者を世俗界に引き寄せたということになる。そして、この点をランゲは批判したわけである。また「永遠の連鎖」とは、終わりなき遡源の進行を意味する。これは先にみた、世界を構成する事象連鎖を原因へ向

35）以下を参照。Christian Wolff, *Oratio de Sinarum philosophia practica/ Rede über die praktische Philosophie der Chinesen*, übersetzt und herausgegeben von Michael Albrecht, Hamburg 1985, Einleitung des Herausgebers. また以下も参照。山本道雄『クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記』晃洋書房 2016年。

36）*Des Herrn Doct. Und Prof. Langens oder: Der Theologischen Facultaet zu Halle Anmerckungen über des Herrn Hoff-Rats und Professor Christian Wolffens Metaphysicam…*（KV）, Cassel 1724, in: WW I. Bd. 17, Hildesheim 1980, S. 18.

けて遡行することを無限背進とみなすことに対する解釈である。では、ランゲの語る「自由と道徳の抹殺」とは何なのか。スピノザによれば、すべては「神の本性の必然性によって」（SE I. Pro. 29, S. 131）決定されている。つまり人間の意志に基づく選択や行為もまた、すべてあらかじめ決定されているのであるから、その端緒は行為者のうちにあるとは言えず、罪は相対化される。換言すれば、人間の行う選択や行為の根拠は、それ以外のすべての出来事の根拠と同様に、自分に先立つもののうちにあることになる。その結果、私たちは先行する状態そして現在の状態という外的・内的な制約から独立することを意味する自由をもたず、したがって原理的に行為の最終的な責任を問われることもなくなるので、道徳そのものが抹殺されるという解釈である。これは、自分に裁量権のない事柄については、その選択や行為について責任が生じないという一般的な考え方に基づくだろう。ピエティスト派神学者はこのような世界観をヴォルフ哲学のうちに読み込み、行為に対する責任の所在を当事者のうちに認めないこと、またその結果行為のもつ善性と悪性を相対化することになるこのような考え方を、危険な思想として糾弾したわけだ。この批判に対してヴォルフは自らの立場がスピノザ主義ではないことを主張する。

> 「私は無限前進 progressus in infinitum を認めない。というのは、（私は未だ神の存在とそして神が自由な決断によってこの［現にある世界を構成する事象］連鎖を決定したことを証明してはいないが）偶然的な存在者を説明するにあたって、終わりなく常に新たな根拠をもたねばならないのならば［…］出来事の連鎖において、そのものの前にはいかなる充足根拠もありえないところに至る。［…］すなわち最後には第一原因または神に至らねばならない。またそのことでわれわれは偶然的なものの充足根拠をうるのである」（KV 20f.）。

ここでヴォルフは出来事の系列を背進する過程が決して無限ではないことを強調している。そして、「第一原因」が存在し、系列の遡行がこの第一原因とともに終了すると見なす。また、この「第一原因」のうちにすべての偶然的事

象の在ることの充足根拠を見る。始原にまで立ち還るならば、無数の可能世界のうちから「神が自由な決断によって」この世界を選んだことに基づいて現実世界のあらゆる事象連鎖が生じたわけであり、別の可能世界のうちでは現在とは異なる出来事が考えられるので、現実の事象連鎖は決して端的に必然的ではないとヴォルフは考えている。ヴォルフは必然性概念を二つに分け、幾何学の命題等については「端的に必然的」、現実の出来事については「ある条件のもとで必然的」であると見なす。個々の出来事は「この世界」という条件のもとでは他ではありえないという仕方で生じているが、「この世界」という条件を取り去り、他の可能世界を想定するならばそこでは他のあり方の可能性が認められるので、端的な必然性とは異なることになる（以下を参照。『ドイツ語の形而上学』§ 575, S. 352–353）。また「神」の「自由」に関しては、スピノザと異なり、「神が自由な決断」を行ったと解釈する。つまり「第一原因」を何ものによっても制約されておらず、自らの本性の必然性によって決定されているのでもない存在者と見なす。「第一原因」とは、これを文字通りに採れば、これに先立ついかなる原因も存在しない端的な原因であり、無制約的な原因である。このような原因を事象が継起する領域である世界に外在する位置に想定するのがヴォルフの立場である[37]。これに対して、「神」の本性を必然性とみなし、その選択に別の可能性を認めず、その活動に恣意性を認めないのがスピノザ主義に他ならない。当時の代表的な哲学辞典であるヴァルヒの『哲学辞典』（1726）には「スピノザ主義」のもとに以下のような記述が見られる。「スピノザ主義については哲学界でかなり頻繁に語られているので、それが誤りであることを私たちは正しく示さねばならないほどである。[…]しかし私たちはスピノザその人についてよりも、事柄そのものを問題としたい。スピノザ主義

37）ヴォルフによれば神は、継起する事象の秩序を成す時間の領域に外在する。したがって継起する事象の領域である世界に外在すると考えているはずである。以下を参照。DM § 1074, S. 664.

によれば、唯一のしかも物質的な実体[38]が提示されており、また神が自然と同一のものと見なされているので、私たちはそこに一種の無神論を理解することになる」[39]。ここではスピノザ主義が明確に「無神論」の立場として理解されており、当時この考え方が多数の人々にとって受け容れ難い立場だったことが読み取れる。またこのテクストからは、スピノザ主義について18世紀の二十年代のドイツ哲学界が軽視することのできない問題として取りあげていたことが伺える。ヴォルフのドイツ語著作から編纂されているマイスナーの『哲学辞典』(1737) の項目「運命」には以下のような記述が見られる。「運命とは[…]不可避的な必然性であり、これによってあらゆる偶然性と自由とが否定される。これを偶然的事物の決定された真理と取り違えてはいけない。もし無神論者が運命を主要な根拠として受け容れ、そして世界の出来事は不可避の必然であり、また全世界そのものも現にあるような仕方以外にはありえないものと見なすならば、世界は自立的であることになり、この世界を産み出し維持する特別の存在者は要らなくなるだろう。そういう次第で、ヴォルフ氏はこのような

38) 原語は„materialische Substanz“。以下を参照。Artikel „Spinizismus“ in: Johann Georg Walch, *Philosophisches Lexicon*, 2 Bde., Leipzig [4]1775 ([1]1726), Bd. II, Sp. 949–956, insbes., Sp. 949. この記述からは、当時のドイツ哲学界にスピノザの実体概念を「物質的な実体」と見なす解釈のあったことが分かる。この解釈はスピノザが現象することのない領域に想定する産出的活動である「能産的自然」を視野に置いていないと言える。この自然についてスピノザは次のように述べている。「先へ進む前に、産出する自然(能産的自然 natura naturans)のもとで、また産み出された自然(natura naturata)のもとで私たちが何を理解すべきであるのかを説明しよう。…私たちは産出する自然のもとで、それ自身のうちにあり、それ自身から理解されるものを理解する。または永遠で無限の存在を表現する実体を理解する。すなわち…自由な原因と見なされる限りでの神を理解する」(SE I, Prop. 29, Schol. S. 132)。ここにみられる「能産的自然」はそれが「永遠で無限」であることから考えて、決して物質的なものではなく、感性的には直接とらえることのできないものである。

39) Artikel „Spinizismus“ in: Walch, *Philosophisches Lexicon*, ibid. Sp 949–956. この項目は1726年の初版に記載されている。

考え方を廃棄した」[40]。ここでマイスナーは引用ないし参照箇所を示していないけれども、先に見たヴォルフ自身のテクストである『ドイツ語の形而上学』に依拠していると思われる。また、ツェードラーの『万有事典』にも「スピノザ」ならびに「スピノザ主義」という項目があり、前者では履歴や著書が紹介され、後者ではその思想が扱われ、「スピノザ主義のもとに私たちは無神論を考えている。というのもそれは唯一の、しかも物質的な実体だけを措定するからであり、したがって神と世界を同一のものと見なすからである」[41]と説明される。スピノザ主義についてはこのような理解が当時の思想界では一般的であったのだろう。いずれにしても、このような世界観相互の対立が、後続する哲学者たちによって「宇宙論」でとりあげられ、ヴォルフ学派の哲学者により「無限背進（前進）」を否定する立場から論じられることになる。同じくヴォルフ学派に属するゴットシェートのテクストでもスピノザの運命論が批判されていた。「スピノザならびにその他の運命論者が、あたかも現実にあるものないしは生起したことだけが可能なのであり、未だ生起していないすべてのことはこの世界では生起することがなく、端的に不可能であると申し立てることはそれゆえ誤りである。というのもこの人々はそのような事物の内的可能性を否定するのであるから、生起しなかったことが自らのうちに矛盾を含むことを証明しなければならないからである。[...]ないしは、それらは内的にそしてそれ自体としては可能な事象であるが、そのことに加えて必要とされる原因が欠けているので外的に可能とならない、ないしは実現しない、ということを彼らは

40）Artikel „Fatalismus“ in: Heinrich Adam Meißner, *Philosophisches Lexicon*, ..., Bayreuth und Hof, 1737, S. 184. なお「スピノザ主義」という項目には「『運命』を参照」とだけ記されている。以下を参照。Ibid. S. 574. なお「偶然」については次のように述べられている。「偶然 contingens とは、それと反対のものもまた存在しうるものであり、またそれと反対のものが矛盾することのないものである。例えばある建物の窓は高くも低くもありうる。偶然的なものは様々な仕方で決定されうるものであり、もしそれがある仕方で決定されるならば、それはまた別の仕方で存在しうる。これに対して必然的なものはただ一つの仕方で決定され、したがってそれ以外のあり方はない」（Artikel „Zufällig“ in: Meißner, *Philosophisches Lexicon*, ibid., S. 760f.）。

41）Artikel „Spinozisterey / Spinozismus“（UL Bd. 39, Sp. 88–94, insbes. Sp. 88）.

主張しなければならない。しかしながらそのようなことを十分な理由をもって説明することはできない」(EG I, § 337, S. 247)。このように述べることで現実の事象連鎖から成る世界だけが唯一可能な世界であると見なすスピノザの立場を批判する。以上を纏めるならば、「私は無限前進を認めない」と語るヴォルフは、無限前進を認めるスピノザの世界観を明確に否定することで自らがスピノザ主義者ではないことを主張したわけである。始原へ向けての背進が無限であるのかそれとも無限ではなく、背進の系列が第一原因と共に完了するのかを巡るここでの世界観の対立をカントが知らなかったとは考えられない。多数刊行された論争書により、または先に触れたようにハレで学んだ神学者シュルツを通じて、カントはハレの神学者とヴォルフの論争について認識していたと思われる。また少なくともツェードラーの『万有事典』やヴァルヒやマイスナーの『哲学辞典』、またカントが所有していたゴットシェートのテクスト[42]などにより、神を世界に外在する超越的存在と見なす考え方に対立するスピノザの世界観をカントは学習していたと思われる。理性の推論に基づくこの互いに対立する二つの世界観を理解することが、『純粋理性批判』で自由の問題を「心理学」から「世界論」へ移すことになる一つの契機となったと考えられる。

2.3 バウムガルテンの「無限背進」不可能性テーゼ

既に触れたように、ヴォルフ学派の「形而上学」では自由概念は「経験的心理学」で論じられ、心のもつ自発性ないし選択意志の問題として主題化されていた。講義の筆記録を見る限りカントもまた70年代の「形而上学講義」では、バウムガルテンの教科書に即して自由概念を主に「経験的心理学」でとりあげている。『純粋理性批判』でカントがこのヴォルフ学派の伝統に反してこの自由概念の考察を「心理学」にあたる「誤謬推理論」から「宇宙論（世界論）」

42）ヴァルダの編纂によるカントの蔵書目録によれば、カントはここに引用したゴットシェートの『世界知の第一諸根拠』の理論編の第五版（1748）を所有していた。以下を参照。Arthur Warda, *Immanuel Kants Bücher*, Berlin 1922, S. 49: „48. Gottsched, Johann Christoph, *Erste Gründe der gesammelten Weltweisheit*…. Theoretischer Theil. Fünfte vermehrte und verbesserte Auflage. Leipzig 1748“.

にあたる「二律背反論」へと移行させたことについて直接影響を与えているのは、講義の教科書であるバウムガルテンの『形而上学』就中「宇宙論」にみられる「無限背進」不可能性テーゼだと思われる。既に触れたように形而上学講義にあたってカントはバウマイスターのテクストを2年間使用した後、1759年以降長らくバウムガルテンの『形而上学』第4版をテクストとして使用していた[43)]。このテクストの「宇宙論」第二章は「世界についての否定的な概念」というタイトルをもち、そこでは先ず「無限前進」がとりあげられている。「否定的（ネガティヴ）」とは、当該対象を「～でないもの」として説明することを意味する。ここでは、世界が無限前進するものではないものとして論証される。換言すれば、無限前進する世界という概念のうちに矛盾のあることから、世界が改めて洞察されることになる。

> 「無限前進（背進）Progressus（Regressus）in infinitum とは、偶然的で互いに離れた事物の系列であり、そしてある観点からすれば、この諸事物のうちのあるものは別のものの原因であり、端的な原因というようなものはない。そのもとで結果であるものがそれ自身原因でもあるとみなされる無限な前進は、円形の前進（円環）である。また結果であるものがそれ自身原因とは見なされない前進は、直線である」（BM § 380, S. 206f.）。

現実に存在するすべての事物は自らの外部に自己のあることの根拠をもつものであり、偶然的存在者であって、それらが集まることでこの世界を構成しているという考え方が、ここに提示されている。偶然的なものとは、そのものの不在やそれが別様にあることが矛盾なく考えられるものであり、世界内のすべての事象は例外なく偶然的なものに帰属する。それはまた、そのあることの根

43）カントは1756年にバウムガルテンの『形而上学』を使用した後、1757年と58年の夏学期にバウマイスターの『形而上学教本』（Friedrich Christian Baumeister, *Institutiones metaphysicae*…, Wittenberg u. Zerbst 1738, Neudruck, Hildesheim 1988）を用いており、その翌年から再度バウムガルテンのテクストを用いるようになった。以下を参照。Hinske, *Kants Weg* …, ibid. S. 56.

拠を自己自身のうちにもつのではなく、自分以外の何かのうちにもつ。例えば私たちの誰もが自らの在ることの根拠を自分の外部に、つまり両親のうちにもっている。そしてあらゆる「父」ないし「母」もまた同様に両親をもち、その両親のそれぞれがまた両親をもつ。このようにして帰結から根拠へ向けての系列はどこまでも遡源することになり、最初のヒトを超えてさらにその先へと、その前史に当たる生物へと背進することになるだろう。そしてそのうちの誰もが自分に外在するところに自らのあることの根拠をもっている。また、この根拠からより先行する根拠への遡源ないし背進は、自らの根拠を自己自身のうちにもつような根拠がどこにもないのであれば、どこまでも続き、無限であると見なされねばならない。このような遡源が、ここでは「円環的 circularis」と見なされている。つまり、すべての原因が同時にまた何か別のものの結果でありそれ自身また自らに先行する原因をもつものであるならば、遡源は直線ではなく円環となるという解釈である。円環はここで遡源の無限性を表現するものに他ならない。これに対して原因をもつものの系列の外部に第一原因を認め、そこで背進が終わると見なすことで、遡源は円環ではなく直線を示すと解釈できることになる。つまり特権的な第一原因を系列から独立するところに置くことで、背進は完了する。経験に即する限り、無限の系列も、最後の根拠も、自己原因であるようなものも、どこにも見出すことができない。したがって私たちは、いわば経験を拡張するために何らかの道具を使って、経験の限界を超え出て推理を先へと進めなければならない。ここで道具となるのが理性による推論である。カントはこれを「弁証的論証 dialektische Argument」（KrV B 525 / A 497）と名付けている。そしてカントによれば眼前に拡がる世界をあくまでも私たちの認識能力に依存的である表象と考え、これをこの認識能力から独立する自体的存在ではないと見なす観点に立脚するのでなければ、理性推理によって世界の全体を認識しようとするとき私たちは二律背反に陥ることになる。

偶然的な事物や存在者がある限り、必然的な存在者が必ずあると考えるのが合理論であり、神の存在証明の考え方である。必然的存在者が欠ければ、世界

は偶然的な存在者だけの集合となり、不動の一点のない集まりとなって、どこにもはじまりが存在しない混沌とした集合体となる。そして、原因へ向けての事象連鎖の系列はどこまでも終わりなくその遡源を続けねばならない。この点についてバウムガルテンは次のように述べている。

「無限前進は、それがどれほど長大なものと見なされようとも、一つの偶然的なものであるだろう。したがってこの前進は自己自身に外在する作用因をもつはずである。この作用因はいかなる偶然的なものでもありえないだろう、なぜならこのものが再び非自立的なものであるならば、このものはただある観点からのみ、無限前進の原因であることになるからである。それゆえそのものは前進そのものの外部にではなく、この前進の一部分であるだろう。したがって無限前進の作用因はある必然的で、非依存的なものであるはずだ。このものはしかし、たとえそれが自らに外在する何かによって引き起こされたのではないにもかかわらず、現存在することができる。それゆえこのものは、自らの外部にあるものによって引き起こされたのではなく、したがって端的にその作用因である。それゆえ無限前進は、端的な原因なしにあらねばならず、またそれにもかかわらず端的な原因をもたねばならないので、不可能である。そしてこの世界でもまたある別の世界でも、認めることができない」(BM § 381, S. 206ff.)。

ここに示されているのは、何らかの原因をもつもの、つまり偶然的なものからなる事象連鎖の系列がその全体として見られるとき、それ自身依存的なもの、偶然的なものと見なされることであり、またそれゆえに自らの外部に原因を必要とするということである。執拗に繰り返されるのは、もし当該の「作用因 causa efficiens」が再び偶然的なものであるならば、それ自身また自らに先行するところに作用因をもつことになり、依存的なもの、原因をもつものの系列の一部とみなされ、このような事象の連鎖の内に取り込まれるということに他ならない。依存的なもの、偶然的なものの成す系列は、それがどれ程継続されようとも、偶然的なものから構成されている限りその全体もまた偶然的なも

のであり、自己の外部に非依存的なもの、端的な作用因を必要とする。もしこのような作用因がなければ、偶然的なものの連鎖の系列は、それ自身のあることの根拠を失う ― これがここでの論述の骨子である。

換言すれば、ここには「無限前進（背進）」が矛盾を孕むことが提示され、またそれゆえにこのような背進の不可能であることが示されているわけだ。そして、背進そのものの外部に第一原因である作用因を置くことでその無限性を否定する立場が提示される。すなわち、この背進を一つの全体として偶然的であると考える限り、すべての偶然的事物と同様この一つの全体すなわち世界もまた、自らの外部にその在ることの根拠をもたねばならない。というのも個々の事物は偶然的であり、例外は認められないのであるから、その全体であり集合である無限背進そのものもまた、偶然的であると見なす他ない。したがって無限背進は、それがどれほど継続されようとも一個の全体として自己の外部に原因ないし自らの存在根拠をもつはずである。

この同じ無限背進はしかし、自らの原因を自己の外部にもつならば、そしてこの原因とともに遡源を終えるならば、もはや「無限」ではない。つまり無限背進はそれが「第一原因」ないし「第一根拠」とともにその背進を終えるならば、もはや無限ではない。したがって、無限背進というものは、そもそもあり得ない、というのがここでのバウムガルテンの主張に他ならない。この論証は、事象連鎖の無限前進ないし無限背進という世界観が孕む矛盾を示すことにより、「第一原因」を承認せざるを得なくする。しかしまたこの「第一原因」が必然的な存在者でないならば、より先なる原因への問いはさらに続くことになる。バウムガルテンはここで「無限背進」が矛盾をもつものであることを論証したうえで「世界に外在する存在者 ens extramundanum」（BM § 388, S. 210f.）を提示する。この存在者は、無限背進の全体とみなされた世界そのものの外部にあるものである。それはまたライプニッツやヴォルフが「神」とみなすものに他ならない。無限背進を不可能であると見なす思考の型式は、既にライプニッツ、ヴォルフそしてゴットシェートのもとに見られる。ライプニッツは『モナドロジー』で、偶然的な事象の原因ないし根拠の遡源について触れ、

この遡源がどれほど長く続くにしろ、その系列の外部にある根拠とともに遡源が終わると見なしている[44)]。「したがって充足根拠ないし最後の根拠は、偶然的な個々の事物の系列がどれほど長くあり得るとしても、その列ないし系列の外部にあるはずである」(Mon § 37, S. 43)。ヴォルフもまた同様の推論で出来事の原因へ向けての遡源が最後にはそのさらに先なる原因というもののない唯一の第一原因に至るとみなす。「先行箇所で私たちは、唯一の神が可能的なすべてのものと現実的なすべてのものの充足根拠を自らのうちにもつことを見た。[...]何ものも充足根拠なしには存在し得ないのであるから、唯一の神が存在するということを私たちは推理しなければならない」(DM § 1080, S. 667)。ゴットシェートもまた同様の図式に基づき、以下のように考えている。「自らの原因をある別のもののうちにもたねばならないそれぞれの事物自体だけでなく、この原因もまた再び自らの根拠をある別の作用因のうちにもたねばならない[…]。このようにして、全世界の起源にまで遡源が続く」(EG I. § 331, S. 245)。そしてこの起源を「神」と名付ける (EG I. § 1147, S. 581)。ゴットシェートによれば、「神はそれゆえ世界に対する作用因である」(EG I. § 1151, S. 583)。事象連鎖の系列はその原因へ向けての遡源を、系列の外部にある原因とともに終える、というのがここにみる共通の考え方である。ここには「第一原因」である「神」を想定することで事象連鎖の遡源を終えること、偶然的な事象に対する必然的な根拠を置くことで世界を秩序ある統一体と見なすことが、あらかじめ意図されていたと思われる。ここでの推論自体は「第一原因」を認めることも認めないことも同様に可能であり、どちらの主張も論駁可能である。バウムガルガルテンの「無限背進」不可能性テーゼについてもまた同様に論駁可能であるだろう。

---

44) Vgl. Gottfried Wilhelm Leibniz, *Monadologie* (Mon), übers. von Arthur Bchenau htsg. von H. Herring, Hamburg [2] 1982 ([1] 1956), § 36 u. 37, übers. von A. Buchenau, hrsg. von Herbert Herring, Meiner Hamburg 1982, S. 42f.

2.4　マイアーによる無限前進（背進）論への批判

バウムガルテンの弟子マイアーもまた、同じく『宇宙論』で無限前進のもつ矛盾について考察しており、そして師と同じく、あらゆる偶然的で有限な存在者にとってその在ることの根拠となる「世界に外在する存在者」を認めることで、無限前進のもつ矛盾を解決しようとする。

> 「充足根拠律[45]を認めるひとは、すべての可能な事物は充足根拠をもたねばならず、またどの充足根拠も再び自らの充足根拠をもたねばならないので、それがもはや再びいかなる充足根拠ももつ必要のないような充足根拠は決して可能ではないと申し立てねばならない。[これと異なり]自然神学において私たちは、神以外のすべての可能的な事物が自らの根拠を神のうちにもつことを承服することになる。さて神のうちには無限に多くの完全性があり、そのどれもが神の本質であると見なすことができる。なぜならそれらの完全性は、それ以外のすべてのものの充足根拠だからである。したがって神以外のすべての可能的な事物の根拠の系列は、ひとつの連関のうちに、可能性と現実性の全系列を通じて、神のうちにまで進む。そしてこの系列は、根拠の無限な円環を神のうちに解消する」（MMC § 314, S. 58）。

ここには、現実世界における事象連鎖の系列の無限前進を駆動するものが充足根拠律であり、この充足根拠律そのものがこの無限前進を惹起する原理であることが明確に示されている。すなわち、可能的な事物はすべて充足根拠をもたねばならず、例外は一切認められない。充足根拠律にしたがう限り、どの根拠もが自己以外のところに、自らの根拠をもち、その系列は無限に続く。しかし自然神学で承認されるように、可能的な事物の総体である世界そのものの根

45）ヴォルフと異なりマイアーはこの原理を der "Satz des hinreichenden Grundes" と記述している。Georg Friedrich Meier, *Metaphysik. Zweiter Theil, Cosmologie* (MMC), Halle ^{2}1765 (^{1}1756), Neudruck, Hildesheim u. a. 2007, § 314, S. 58.

拠は、これらとは次元の異なる神のうちにある。この文はこのように解釈することができる。また節を改めてマイアーは再び「矛盾は、世界の偶然性を認めつつ、同時に世界の第一原因を否認することにある」（MC § 315, S. 60）と述べ、世界が偶然的な事物から成るそれ自身偶然的なものであることを確認したうえで、この矛盾を解決するために改めて次のように推論する。

> 「したがって無限前進を自らのうちに含むはずの世界は、それにも関わらず一つの作用原因を自己の外部にもつ。この作用原因は必然的なものであり、同時にまた自立的で無限なものである」（MMC § 315, S. 60）。

世界が事象連鎖の無限背進を自らのうちに含むとしても、その全体に対する充足根拠を自らの外部にもたねばならず、その根拠はそれ自身偶然的ではなく必然的であり、依存的ではなく自己原因的なものであるということがここに改めて述べられている。このテクストにもスピノザ的世界理解に対するアンチテーゼが読み取れ、この時代に共通する一つの世界観が確認できる。このような矛盾対立する世界観が、『形而上学』の「世界論」で繰り返し論じられていたこともまた以上のことから理解できるだろう。

これまでにみたライプニッツからマイアーにいたる哲学者たちの思考には、「世界 ― 世界に外在する存在者」というペア概念がみられる。これは偶然的な事象の現に存在することから、その第一根拠である必然的存在者を推論する、いわゆる神の「宇宙論的証明」として纏めることができる。

(1) 世界内に生じる個々の事象は、すべてそれが別様にあることないしその不在が考えられる偶然的なものである。なぜなら、この世界は無数の可能世界の一つにすぎず、この世界での事象連鎖とは異なる事象連鎖の系列からなる世界が考えられるからである。
(2) 偶然的な事象は存在することの根拠を自らの外部にもち、この根拠によって決定されている。個々の偶然的なものから成る世界は、一個の全体とし

てそれ自身偶然的であり、自己の外部に自らのあることの根拠をもち、その根拠によって決定されていると考えられる。

(3) 世界の外部にあるその根拠は、偶然的ではなく必然的であり、自己のあることの根拠を自らのうちにもつような存在者である。もしそうでなければ、その根拠もまた偶然的なものであり、自身の外部に自らの根拠をもつことになり、一個の全体としてそれ自身偶然的である世界の一部であることになる。したがって、世界の外部にあるこの必然的で自己原因的である存在者のうちに、すべての偶然的事象の、またその総体である世界そのものの、充足根拠があるはずである。

18世紀半ばまで複数の哲学者に共有されていたこのような世界観がカントの「アンチノミー」論の基層に認められる。特に第三、第四アンチノミーに関しては、このような世界観が「定立」の立場の基礎に認められる。これに対して「反定立」へと続くのは、先にみたようにヴォルフやバウムガルテンがそれと対峙し、批判することで自らの体系を基礎づけることになったスピノザ主義の世界観だった。このような哲学史の脈絡に世界のあり方についての「アンチノミー」が省察され、これを止揚する観点から超越論的観念論が構築されることになったと考えられる。

2.5　カントによる「無限背進」不可能性テーゼの受容と批判

既に触れたように1759年以降一貫してカントはバウムガルテンの『形而上学』を同名の講義の教科書として用いていたので、先に見た「宇宙論」に見られる無限前進ないし無限背進不可能性テーゼについて、講義ならびにその準備や反省を通じて遅くとも70年代には知悉していたはずである。またその背景にあるスピノザの無限背進テーゼやこのテーゼに関わるヴォルフとピエティスト派神学者の論争について、カントが知らなかったとは考えられない。ヴォルフのハレ追放は当時の講壇社会でのスキャンダルであるので、このことについてもカントは知っていたと思われる[46)]。

ここでは先ず、1760年代のものとされるメモ書き遺稿を見ることにしたい。この時期の遺稿には、「選択意志」が感性的な動因を退け知性の提示する動因にしたがうことのうちに成立する自由、つまり心理学的な自由とは異なる概念への反省が認められる。すなわち事象連鎖の総体のうちに「選択意志」の活動を反省し、この「選択意志」が先行的決定根拠からいかなる意味で独立しうるのかということが問われている。「最も困難なのは次の問いである。すなわち、作用因または決定因の連鎖のうちにあって[…]しかも主観的には無制約的であるような選択意志が、いかに思惟されうるのだろうか」(Refl. 3860, XVII 316; η(κ) 1764-68, 69)。このメモ書きは『形而上学』中の「経験的心理学」で「選択意志 arbitrium」を扱う20節(§ 708-718)の最初の項(§ 708)の箇所への書き込みであり、直接「宇宙論」の脈絡で反省されたものではないが、作用因ないしは決定因の連鎖のうちなる人間が、端的な「第一原因」と同様の原因性をもつことができるのか否かということが問われており、決定根拠の連鎖系列という問題のコンテクストに関わっている。決定根拠の連鎖のうちなる無制約的な「選択意志」の可能性を問うこの問題には、世界論のうちに自由を省察する観点が認められる。そしてこの観点こそ「経験的心理学」で自由概念を考察するヴォルフやゴットシェート、そしてバウムガルテンのもとには見ることができなかった観点に他ならない。繰り返すならば「選択意志」はここで事象連鎖の総体である世界のうちに省察されており、その選択が先行的決定根拠か

46) 先に触れたように、カントが神学を学んだフランツ・アルベルト・シュルツ(1692-1763)は、ハレ大学で学んでおり、ツェードラーの『万有事典』によれば、哲学をヴォルフに、そして神学をピエティスト派の神学者たちに学んでいた。彼は、ヴォルフの国外追放が起こる少し前のハレで、スキャンダルの当事者のもとに学んでいたわけである。また同事典によれば、1717年にシュルツはヴォルフと神学者 J. ランゲに対話の機会を仲介している。ヴォルフは自分の教え子のうちでもこのシュルツを特に信頼していたようである。この両者の間の争いについて、また先に見た自由原因をめぐる二人の論争についても、カントはシュルツから直に聞いていたかも知れない。そうでなくとも、大学図書館や市内の書店を通じて学術情報を収集することのできたカントは、宇宙論ならびに自然神学の主題である自由な原因についてのこの論争について理解していたと思われる。以下を参照。Hinske, Kants Begriff der Antithetik..., ibid., insbes. S. 54f.

ら独立することはどのような条件のもとで可能となるのか、ということが反省の主題となっている。ここには自由概念をめぐる問題に対してカントが獲得した新たな視点が際立った仕方で表現されていると言えるだろう。

また別の箇所では「運命論からの自由（超越論的）」が、「衝動からの自由（実践的なあり方の自発性）」（Refl. 3863, XVII 317）との対照のうちに置かれている。前者は事象連鎖の総体のうちに反省された自由であり、宇宙論的な意味での自由である。後者は、経験的心理学の脈絡に反省された実践的自由に他ならない。また、「実体は、その行為の原因性が受動的ではないような適意のうちにある限り、自由な選択意志から働いている。[理解]困難なのは…自由という第一の理念である。この理念は必然的存在者のもとでも偶然的存在者のもとでも、把握することができない」（Refl. 3857, XVII 314f.）。ここでは、「偶然的存在者」すなわち人間のもとでだけでなく「必然的存在者」のもとでも、自由概念については容易にこれを理解することができないことが指摘されている。ここでの「第一の理念」は単に動作を始めるといった働きだけでなく、それに先立ついかなる状態ももたないことを含意するだろう。つまり始原的な作用と同時に無制約的な状態を自らのうちに含まねばならない。そして働きないし作用は結果の側から把握可能であるが、無制約的な状態そのものは決してこれを直接把握することができない。このような状態としての自由、すなわち自由の消極的な側面にこの問題にまつわる真の「困難」があるといえる。すなわち問題の核心は、事象連鎖のうちなる人間が、いかにすれば無制約的な状態を前提にしてのみ成立する端的な第一原因性をもつことができるのか、ということである。そしてこの問いは無限背進という問題のコンテクストのうちに省察される。換言すれば、事象連鎖のうちにありつつ行為主体のうちに無制約的な「選択意志」を認めるためには、どのような世界観が求められ、またその世界観のうちでどのような条件が必要となるのかということが、主導的な問いとなる。「充足根拠律」からの独立を意味する自由について反省するに際して、この問いが常に繰り返しカントの念頭に浮かぶことになったはずである。

また次のメモ書き遺稿では自由が生成の第一の原理と見なされている。「生

成の（可能性の）最高原理は自由である」（Refl. 4033, XVII 392）[47]。そして創造という行為の根底に洞察される働きについては以下のように述べられている。「創造（起始）は自由から起こる」（Refl. 4142, XVII 431）。以上、アディッケスが60年代の終わり（Refl. 3857, 3863, 4033, κ－λ：およそ 1769–1770）、そして主に70年代（Refl. 4142, κ^3－υ^3：およそ 1769–1778）の筆記録と推定する遺稿には、事象連鎖の総体のうちに反省された「第一原因」としての自由概念が、既にその多様な初期形態のうちに現われている。以上に見た個所で自由は、「無制約的選択意志」、「第一の理念」、「生成の最高原理」と換言され、「創造」の前提と見なされ、これを直接把握することはできないけれども、しかし世界全体の起始を理解するために、また有限な存在者のうちに行為の帰責可能性を認めるために、不可欠の条件と見なされている。これらのメモ書き遺稿にみる自由概念は宇宙論の脈絡に反省されており、事象の総体としての世界の問題に関わる理念を提示している。

次に、『就職論文』（1770）でのカントが無限背進テーゼに対してどのように考えていたのかを見ておきたい。結論から言えば、カントは世界内の事象をすべて偶然的であると見なし、またその全体である世界についても同じく偶然的であると考え、これに対する原因を世界に外在する必然的存在者と理解することで、反スピノザ主義の立場を採っていた。「叡知界の形式の原理」という章でカントは次のように述べている。

> 「世界はその本性からまったく偶然的に現存在する諸物から成る。[…]必然的に現存在する実体の世界に対する結びつきは、原因の結果に対する結びつき以外の何ものでもなく、[…]世界の原因は世界に外在する存在者であり、したがって世界霊ではなく、その世界内での現存在は空間的ではなく、潜在的である」（De mundi

47）この文は次の文とペアを成している。「あらゆる偶然的なものの最上原理は絶対的に必然的なものである」（Refl. 4033, XVII 391）。後年『純粋理性批判』で第三、第四アンチノミーとして提示される二つの理念がここでは「最上原理」として一緒に考察されており、両者の緊密な関わりが窺える。

§ 19, A 25)。

ここにみられる「世界霊 anima mundi」がどのような存在者を意味するのか、ここでの文言からだけではこれを周到に理解することは難しい。しかしこれが「世界に外在する存在者」と対比されていることから考えるならば、ここでの「世界霊」は汎神論的な「神」を意味するものであるだろう[48)]。したがってこの引用文からカントがスピノザ主義を明確に否定する立場を採っていたことがわかる。そしてここでは原因と結果という純粋悟性概念が明確に感性界を超えるところまで拡張的に応用されている。この点に関する限り『就職論文』でのカントは、カテゴリーの適用範囲を現象の領域に制限する『純粋理性批判』の立場とは異なる観点に立っていたと言える。

なお『純粋理性批判』でのカントは、事象連鎖の系列を原因へ向けて遡源することに関わる無限背進の問題を、世界の理解に関わる「理性の自己自身との論争」(KrV B 525 / A497) とみなし、無限背進を肯定する立場とこれを否定する立場双方について、系列の総体である世界を独立自存するものと見なす誤った世界観に基づくとして、両者ともに否定する (以下を参照。KrV B 525–530 / A 497–502)。そこでは、世界の原因として世界に外在する存在者について肯定的に語る『就職論文』とは明確に異なる視点が提示されることになる。すなわち1781年以降、認識可能な対象として「神」が語られることはなくなる。また、神の宇宙論的証明[49)]については、ヴォルフの『形而上学』では「自

48) 例えば、『エチカ』では以下のように述べられている。「私たちが神ないし自然と名付ける永遠で無限な存在者」(SE IV. Praefat., S. 383)。「存在するものは全て神の内にある、そして神なしにはいかなるものも存在できず、また考えることもできない」(SE I. Pro. 15, S. 107)。

49) 宇宙論的証明をカントは以下のように纏めている。「もし何ものかが現存在しているならば、端的に必然的なものも存在しなければならない。さて、少なくとも私自身が現存在している。したがって、ある絶対的に必然的な存在者が現存在する」(KrV B 632f./ A 604f.)。またこの「証明」は以下のように言い換えられている。「偶然的なものはすべて自らの原因をもち、もしその原因もまた偶然的であるならば、同様にまた原因をもたねばならない。そして次々と従属する諸々の原因の系列が、一つの端的に必然的な原因のもとで終るはずである。というのも、このような原因

然神学」に相当する「純粋理性の理想」の章で、存在論的証明、物理神学的証明とともにとりあげ、その誤りであることを論証している（以下を参照。KrV B 631-642 / A 603-614）。無限背進の不可能性に関する世界理解についてカントは神の存在証明を批判する脈絡でとりあげ、簡潔に否定する。

> 「現象界において次々と与えられた諸原因の無限系列というものの不可能性から、第一原因を推理するという推論について言えば、そのために必要な理性の諸原理を現象界において使用する権利すら私たちには与えられていない。ましてやこの原則を現象界を超えて（この[諸原因の]連鎖はそこ[第一原因]までは決して延長されえないから）拡張することはできない」（KrV B 637f./ A 609f）。

ここでの理性的原理とは、偶然的な事象のあることからその第一原因でありそれ自身必然的である存在者へと推理を導く原理である。そして、偶然的な諸々の事象のあることからその原因である必然的な存在者を現象界のうちに推論することは私たちには与えられていない権利であり、許されていないとされる。ましてや現象界を超え出て必然的存在者を推論することは越権行為であることになるというのがここでの論旨である。このようにカントは伝統的な「神

がなければ系列は完成されないからである」（KrV B 633 / A 605 Anm.）。この証明に対するカントの批判の要旨は、偶然的なものから必然的な一つの原因を推理するという原則は、ただ感性界でのみその使用が許されるものであり、この領域を超えて使用することは越権行為となるというものである。これまでにみた複数の論者による宇宙論にみられる、無限背進を否定するために第一原因を系列の外に推論することが、ここでは批判されている。「偶然的なものから一つの原因を推理するという超越論的原則は、感性界においてのみ重要性をもつものであり、その外部では決して意味をもつことがない。というのも、偶然的なものというまったく知性的な概念は、因果性概念のように総合命題を産み出すものではないからである。因果性の原則もまた、感性界のうちでのみその使用の意味と徴をもつにとどまる。ここでしかし宇宙論的証明は感性界を超え出ていくために、この原則を用いようとする」（KrV B 637 / A 610）。偶然的なものの存在から必然的な存在を推論する宇宙論的証明が、因果性概念の超感性的対象への適用と同様、越権行為としてここで批判されている。

の存在証明」に用いられていた「無限背進」の論理についてその重要性を否定したと言える。この無限背進については「二律背反論」で「理性の統制的使用」について説明する脈絡で、時間に関する世界の始原へ向けての遡源、空間の限界、物質の分割についての被制約から制約への系列の背進は「無限背進 regressus in infinitum」であるのか、それとも、その距離が測りがたい「不定な背進 regressus in indefinitum」[50]であるのかという新たな対概念を用いた問いのもとでもう一度主題化されている。そこでは物質の分割（第二アンチノミー）の場合のように制約の系列が経験的直観によって全体として与えられているとき、つまり与えられた全体（被制約）から部分（制約）へと背進するとき、背進は「無限」であると言われる。その理由はカントによれば、被制約のうちに制約がすべて与えられており、その系列全体が既に与えられていて、背進の距離は定まっているので「不定」ではないからである。これに対して時間に関する世界の始原へ向けての背進では、被制約（現在の時間）から制約（先行する時間）への背進は、その全体が与えられておらず、そのつどの背進によって制約が初めて与えられるので、始原への背進はただ課されているに過ぎない。したがってこの遡源の長さは定まっておらず、「不定」的な距離へ向けての背進と見なされる[51]。

以上のような「第三アンチノミー」についての「宇宙論的起源」の考察によって、カントが自由概念を主題化するコンテクストを「心理学」から「宇宙論（世界論）」へと変更したことについての理由の大枠が理解できるだろう。自由概念は事象連鎖の総体のうちに、また原因と結果の系列のうちに反省され、その系列のうちなる「第一原因」としてその可能性が吟味されていたわけである。

50）「さて、第一の宇宙論的課題の解決のためにさらに必要なのは、（時間と空間に関する）世界全体という無条件的な量へ向かう背進において、この決して限界づけられることのない上昇は、無限背進と名付けることができるのか、それともただ不定的に継続される背進（in indefinitum）と名付けうるだけなのか、という問いに答えることだけである」（KrV B 546 / A 518）。当該箇所での回答によれば、ここでの背進は無限に進むことを意味するものではなく、空間的時間的拡がりが与えられるたびごとにそのつど継続される不定的な背進である。

51）以下を参照。KrV B 538–543 / A 510–516 ; B 551–555 / A 523–527.

それはすべての事象が先行的な決定根拠をもち、これによって制約されているという決定論的な世界観のうちで、それでも先行する原因をもたない第一の原因であるものとして考えられていた。そして結果から原因へと遡る系列の遡源にあって、この系列のうちにあるではなく、その全体の外部に想定される「第一原因」として考えられていた。しかし、このような考察から、事象連鎖系列のうちに自己を見出す人間の自由については、その可能性が直ちに明らかになるとは思えない。世界のうちなる存在者がもつ自由については、どうしてもこれとは別の思考の枠組が求められる。カントが「作用因または決定因の連鎖のうちにあって[…]しかも主観的には無制約的であるような選択意志が、いかに思惟されうるのだろうか」（Refl. 3860, XVII 316）と問うとき、そこで問題の核心となっていたのは、世界の内なる存在者が、どのような条件で先行的な決定根拠から独立することができるのか、ということだったはずである。そして、この点について示唆を与えるのが、当時の思想界で複数の哲学者に支持されていた「均衡中立の自由」である。この自由は、世界のうちにありつつ先行的決定根拠の一義的な決定性を相対化するものに他ならない。以下では、クルージウスのテクストのうちに簡潔にこの自由概念を見ることにする。

2.6　クルージウスの根拠律批判と均衡中立の自由

カントが『純粋理性批判』で自由概念を「心理学」でではなく世界全体の進行を省察する「宇宙論（世界論）」で主題化することについては、クルージウスの根拠律批判ならびに自由概念がそのモデルになっていたと思われる。クルージウスは、ヴォルフの世界概念のうちではあらゆる事象が先行的決定根拠をもつので、人間の意志による行為もまた例外ではなくまったく決定されており、したがって人間に本来の自由は認められないことになると批判する。

> 「もし何であれ生起するものがすべて決定根拠をもたずには生起しえないのであれば、生起していないものは実際に生起することができないのである。というのもその決定根拠がどこにも存在しないからである。少なくとも現在その根拠は存在し

ておらず、したがって今は少なくとも生起することはない。しかし同じことが根拠の根拠に関しても妥当する。そして先行する諸々の根拠のうちの三番目、そして一千番目の決定根拠についても妥当する。そしてまた、これらをどこまで背進的に遡源していったとしても、どのような存在にも、またあらゆる状況に対して、同じことが妥当するだろう。したがってすべての現前している事象のみが、その反対が生起しえないゆえに必然的であるだけではなく、先行する事象のすべての系列も同じその必然性によって強制されているのである。かくて何であれ生起するものはすべて、不可避的に絶対的必然性によって生起する」(De usu § 5, S. 21)。

これはクルージウスの観点から見たヴォルフの世界観である。そしてここには充足根拠律に基づく決定論的な世界観に対する批判が読みとれる。このように理解される世界のうちでは、どの事象生起もが他ではありえないという仕方で決定されていることになり、したがってその全体である事象継起の連鎖それ自体もまた他ではありえないという仕方で決定されていることになる。ヴォルフは世界を「機械」に譬えているので、そこに決定論的世界観を読み込むことが確かに可能であるだろう[52)]。このような世界観に対するクルージウスの批判の意図は、すべてが決定されているのであれば、「私」の選択や行為、そしてその道徳的働きもまた「私」の意志による決定以前に既に決まっていたことになり、そして「徳はまさしくよき運として、悪徳は悪しき運として理解されねばならない[...]」(De usu § 9, S. 37) ということを明らかにすることに他ならない。確かに、決定論的世界のうちでは行為の責任を行為者に問うことが原理的に困難になる。どのような行為もそうなるべく決まっていたとすると、行為主体の選択はこの主体が行うものであると同時にこの主体を超えたところで決定されていることになる。したがってその行為がもたらす利益と害悪につい

52) ヴォルフには「世界」に関する以下のような記述がある。「機械とは、その作用が合成という仕方に基付いているような複合体である。同じく世界も、その変化が合成という仕方に基付いているような複合体である。…したがって世界は一つの機械である」(DM § 557, S. 557)。

て行為主体自身にその最終的な責任を問うことができない。そして、この点をクルージウスはここで批判するわけである。換言すれば誰もが事象連鎖の系列のうちに自らを見出し、先行的決定根拠によってその選択が他ではありえないという仕方で決定されているとすると、行為主体には裁量権がなく、したがってその責任はこの主体にではなく先行するところにある決定根拠に帰すべきことになる。行為の主体にその責任を帰すためには、意志ないし選択意志に対する先行的決定根拠の決定性を廃棄することないし少なくとも制限することが必要である。そのためにクルージウスは意志に対する決定根拠について、それが一義的に決定されているのではないと考える。すなわち「自由な諸行為のもとには…事実充足根拠がある。しかしそれはただ充足原因であって、生起することを唯一のあり方で決定する原因ではない」(De usu § 45, S. 132)。そして原因と結果の連鎖のうちにありつつ、先行的決定根拠によって決定されていない活動性を人間のうちに認めるための前提となるのが「均衡中立の自由」である。意志は悟性の提示する表象に必ずしたがうものではなく、これにしたがわず別の表象と比較考量することができる。

> 「完全な自由はまた、無差別の自由ないし均衡中立の自由と名付けられる。この自由は、どこにでも見出されるものではなく、ただ次のような場合に、すなわち二つの客体が最終目的として、少なくとも私たちの洞察によって同等の価値をもつとき、もしくは同等の強さで欲求する二つの最終目的のもとでどちらかを選ぶべきときに、生じる」(Anw. § 49, S. 60f.)。

「均衡中立の自由」は先行的決定根拠の決定性を制限する役割を果たすものであり、その限り理論的関心に基づく概念であると言える。この自由概念はまた、「生起することを唯一のあり方で決定する原因」をもたないことのうちに成立し、それ自身消極的な自由概念である。それは自然のうちに見出されることは稀な概念であり、意図的につくられた技巧的な概念であるかのような外観をもつと言える。しかし、様々な意味で消極的であるこの概念が前提となるこ

とで初めて自由の積極的な概念が提示可能となる。クルージウスは次のように述べている。「次の事柄の解明は形而上学に帰属する…。結果と作用因の間には、動作ないし活動性があるはずであり、その[結果から作用因への]系列はしかし無限に進むことはできず、そしてこう私は述べたいのだが、ついには最初の動作ないし根源的活動性へと至らねばならない。この根源的活動性 Grundthätigkeit は、それの前には決して再び別の作用因の活動性が先行することがなく、直接に活動的根源力 thätige Grundkraft それ自身の本質から直接に生じている」(Anw § 41, S. 49)。ここに見られる「活動的根源力」はまずは世界の始原の位置に想定されるものであるだろう。しかしそれだけではなく、「均衡中立の自由」を前提に、そのつど私たちが行う選択や決定が、決定論的な意味での、すなわち他ではありえないという仕方で決定する根拠をもたない活動とみなされ、したがって「第一原因」として理解されることになる。この点については次のようにも述べられている。

> 「あらゆる有限な精神の意志は、自己自らの実体の運動を始めることができ、またそれによって別の有限な実体に作用する能力をもつはずである。また意志はそれとともに始原的な運動の諸原因の系列に帰属する」(Ent § 455, S. 890)。

先の「活動的根源力」がここでは「意志」のうちに認められている。そしてこのような根源力を担う意志は「根源的な運動」の主体であり、事象連鎖の系列としての世界のうちにあって「諸原因」の系列をその運動によって**自ら始める**能力をもつと解釈される。また、同じ個所には主語を代えて以下の記述がみられる。「およそ精神であるものは世界内における活動的原因であるはずなので、この精神はそれによって別の有限な事物に作用すべき運動を、内的な活動性から始めることができるはずである」(Ent § 455, S. 890)。先に見た「活動的根源力」、ここでの「活動的原因」にほぼ対応する概念として、同書の「存在論」に見られる「自由な第一の活動 actio prima libera」(Ent § 83, S. 148)をあげることができる。これは、ある特殊な「根源的活動性」であり、作用原

因自身の内に見出され、決して自身以外の活動性ないし実体から生み出されるのではなく、また実体の単なる外的な変化を意味するものでもない（以下を参照。Ent § 83, S. 145ff.）。この「第一の活動」はただ次のような場合にだけ、「第一の自由な活動」として承認される、すなわちもしその活動が行われないでいることも可能な場合である。「もし作用実体がそのようなあり方で、すなわち活動をまったく行わないでいることや、現在の状況に止まり続けることができないならば、それは根源的活動性ではありうるが、それが現状に止まることができない限り、自由な第一の活動ないし自由な根源的活動ではない」（Ent § 83, S. 147f.）。現行の活動を行うこと、これを行わないことが双方共にまったく同様に可能であることが、「自由な第一の活動」であることの条件である。この自由概念は、「均衡中立の自由」を前提に初めて考えることのできる積極的な自由概念である。充足根拠律の妥当性を制限することに基づいてこのような二つの自由概念が産み出されるわけである。換言すれば、「均衡中立の自由」は自由の消極的な概念であり、「自由な第一の活動」は同じ自由の積極的な概念である。そして、自由概念のうちにこのような二つの側面を認める観点が、事象連鎖の総体のうちに自由概念を反省し、原因と結果の連鎖のうちにありつつ、しかも同時に先行する原因から独立し、ある状態を自ら始めることを意味する自発性の自由をカントが形成することに一つのモデルを提供していたと考えることができる。カントが「絶対的自発性」と述べ、「私が宇宙論的自由のもとに理解するのは、ある状態を自ら始める能力である」（KrV B 561 / A 533）と語るとき、そこで考えられているのは自由の積極的概念であり、クルージウスが「第一の自由な活動」と語る概念に相当する。これに対して、この積極的な概念と一対であり、消極的な自由概念であるのが1770年代のものとされる講義録で「私たちの自由な行為は…いかなる決定根拠ももたない」[53]（MPöl S. 210）と述べられる際の自由概念である。この消極的概念が成立しなければ、

53）K. H. Pöliz, hrsg., *Immanuel Kants Vorlesungen über die Metaphysik*, … Erfurt 1821, Neudruck Darmstadt 1988, S. 210, wiederabgedruckt in: *Kants Akademie Ausgabe* Bd. 28. 1, S. 271.

原理的に積極的概念もまた成立しえないはずである。先に触れたようにカントは『新解明』(1755)ですでにこの「均衡中立の自由」をとりあげ、基本的に批判する立場をとっていた。またその後もこの自由概念について肯定的に語ることはなかった[54)]。しかし、事象連鎖の系列の内なる無制約的な選択意志を考えるとき、そのモデルとなりえたのは先行的決定根拠を相対化する「均衡中立の自由」を措いて他にない。この概念が事象連鎖のうちなる無制約者という理念のモデルとなったと考えられる。

3.0　1770年代のメモ書き遺稿にみるカントの二律背反論

1770年の『就職論文』でカントは、感官を通じて捉えられる感性界と、純粋悟性が直に把握するはずの叡知界を区別し、それぞれの領域に固有の法則を認めていた。そして、そこでの二つの法則、すなわち「感性の法則」と「純粋悟性の法則」の示す命題を、誤って私たちは同一の命題と見なすことで、先にみた事象連鎖の系列に関する無限背進の問題に陥ることになると指摘し、これを「取り違えの誤謬 vitium subreptionis」(De mundi § 28, A 34)と名付ける。この誤謬は次のように提示されている。「純粋悟性の諸法則にしたがえば、結果したものの系列はすべてこの系列自身の根拠をもつ、すなわち、結果したものの系列の遡源は限界なしにはありえない。しかし感性の諸法則にしたがえば、同位的に置かれたものの系列はすべてその系列自身の指示することのできる始まりをもつ。これらの命題のうち、後者は系列の可測性を、前者は全体の依存性を含意しているが、誤って同一の命題と見なされている」(ibid.)。この対立命題は先に見たように、ヒンスケの区分によれば法則相互の矛盾を意味

54) 例えばカントの講義を筆記した「ムロンゴヴィウスの形而上学」には、「均衡ないし中立とは、私たちが同じ様に欲求し、また忌避することである。このようなことはしかし人間には稀にしか起こらない」等と述べられている。以下を参照。*Metaphysic vorgetragen von Prof. Immanuel Kant, nachgeschrieben von C. C. Mrongovius, 1783 d. 4. Febr*. in: *Kants gesammelte Schriften* hrsg. von der Akademie der Wissenschaften der DDR…, Bd. 29. 1. 2, Berlin 1983, S. 901.

する二律背反の第二段階を示すものであり、ここで矛盾するのは「感性の法則」と「純粋悟性の法則」である。70年以降のカントはこの二つの法則が矛盾するという理解に基づいて、生成する事象の全体としての世界について反省を続けることになったはずである。その痕跡を確認しつつ、批判期にみられる理性法則相互の二律背反論へと至る過程を跡付けてみたい。確認しておくならば、「感性の法則」と「純粋悟性の法則」の相互対立関係がアンチノミー問題の第二段階を特徴づけるものであり、「理性法則」相互の対立が第三段階の「二律背反」固有の特徴である。したがって70年代の思索を通じて「感性の法則」と「純粋悟性の法則」の対立から「理性法則」相互の対立へとカントの解釈が変化したわけである。

すでに見たように、カントが講義の教科書として使用したバウムガルテンの『形而上学』の手択本には、この間の思索の様々な痕跡が見られる。以下ではこのテクストへのメモ書き遺稿を資料にカントが二律背反論を形成する過程を素描したい。先に見たようにバウムガルテンはこの教科書の「宇宙論」で「世界についての否定的な概念」という表題の下に事象連鎖の系列の無限背進を主題化し、その背進の不可能であることを論証していた。そのテクストの „§380“ の欄外に記されたカントのメモ書き遺稿のなかに、次のような記述が見られる。

> 「ここで私たちはただ、知性的な系列 intellectuale Reihe は第一のものをもつということを証明するにすぎない（系列の原因は系列のうちにはなく、したがって第一のものではない。それゆえ系列は、第一のものなしにありうるし、また系列のうちにあるのではない原因をもちうる）。現象の内なる系列について私たちは論じない」（Refl. 5361, XVIII 161, *υ*? 1776–78）。

このメモ書き遺稿は、まずはこのバウムガルテンのテクスト自身のテーマである事象連鎖の系列の「無限前進」についてのコメントとして読むことができる。バウムガルテンは世界を構成する要素に関して、これを単純実体と複合実

体とに分け、前者を本来の実体である「モナド」（BM § 230, S. 144）、そして後者を「複合実体」（BM § 232, S. 144）、また「実体化された現象」（BM § 233, S. 144）と名付けることで、空間ならびに時間的に現象するものと現象することのないものを分けている[55)]。この区分は、曖昧で混乱した認識をもたらす「下級認識能力」（BM § 520, S. 276）である「感性」と、明晰な認識をもたらす「上級認識能力」（BM § 624, S. 330）である「悟性」との間に連続した段階的な差異が認められるのと相即的に、連続した段階的な差異を示すものであるだろう。したがって「感性」を空間と時間という形式による直観の能力と見なし、「悟性」を概念的思惟の能力であると解釈することでその連続性を遮断する批判期のカントの立場とは異なる。つまり単純実体と複合実体の区別は、物自体と現象の区別とは異質のものである。確かに『就職論文』でのカントは、感性的直観を欠いた悟性だけによる対象認識の可能性を認めていたのであるから、悟性による直接的な対象把握すなわち「直観」の可能性を認めていたことになり、批判期の認識論の基層にある感性的「直観」と悟性的「思惟」を区別する立場とは異なると言える。しかし、空間と時間を感性的認識の第一原理と認め、これと悟性的認識の原理である純粋概念を截然と区別する点で、二つの認識能力をそれがもたらす認識が曖昧であるか明晰であるかを基準に区別するバウムガルテンの立場とは異なる観点に立つと言える。このメモ書き「レフレクシオーン 5361」を教科書への注釈と見なすならば、ここで「系列のうちにはなく」、そしてこの「系列の原因」であると見なされているのは、「世界に外在する存在者 ens extramundanum」（BM § 388, S. 210f.）であるだろう。カントはここでバウムガルテンの世界概念をモデルに「知性的な系列」を考えており、この系列がもつはずの「第一のもの」を「系列のうちにあるのではない原因」と見なしている。「知性的な系列」とは、これを感性によっ

55）増山浩人によればバウムガルテンは世界を「複合体」ならびに「系列」という二つの観点から考察している。本稿の主題に関わるのはバウムガルテンが世界を事象連鎖の「系列」として理解する観点である。以下を参照。増山浩人『カントの世界論 バウムガルテンとヒュームに対する応答』北海道大学出版会、2015年、第一章「バウムガルテンの世界論」pp. 23–74。

て空間的ならびに時間的に対象化することができないとしても、これについて「純粋悟性の法則」に基づく推論を継続する限りその外部に必ず第一原因が想定される系列である。同様のことが以下のようにも述べられている。

> 「理性が原因であるところには、また第一のものが見出される。すなわち自由と最高の存在者が[見出される]。しかし理性がただ結合だけを認識するところでは、結合は無限である」(Refl. 5362, XVIII 162; υ 1776-78)。

このメモ書き遺稿もまたバウムガルテンの『形而上学』の „§ 381“ の欄外に記されたものであり、無限背進の不可能性について論証する箇所に付されているので、同じくこのバウムガルテンの論証へのコメントとして読むことができる。カントはここで二つの世界という思考の図式を根底に置き、一方で感官の対象からなる感性界を、他方ではこれとは区別され知性によって把握されうるもう一つの世界を想定する。後者は『就職論文』で「叡知界」として示されたものに相当するだろう。このメモ書き遺稿で「理性がただ結合だけを認識するところ」とは、空間と時間という形式のうちに拡がる感性界であり、そこでは原因と結果の結合は限界をもたず、結果から原因への遡源は空間と時間が拡張される限りどこまでも継続される。またここで認識の主体と見なされている「理性」は、概念を用いて対象認識を行う能力であり、悟性と区別されることのない認識能力である。そして「自由」と「最高の存在者」を「第一のもの」として認めるこの認識能力による遡源は、「結果したものの系列はすべてこの系列自身の根拠をもつ」とする『就職論文』での「純粋悟性の法則」(De mundi § 28, A 34) による推論に相当する。また「第一のもの」を承認しこれを「自由」そして「最高の存在者」と見なす点で『純粋理性批判』での第三アンチノミーと第四アンチノミーの「定立」に対応してもいる。『就職論文』と異なるのは、そこでの「感性の法則」にしたがう領域が、このメモ書き遺稿では「理性がただ結合を認識するところ」と述べられていることである。『就職論文』で「感性の法則」すなわち「同位的に置かれたものの系列はすべてそ

の系列自身の指示することのできる始まりをもつ」と語られたことが、ここでは理性が「ただ結合を認識するところでは、結合は無限である」と言い換えられている。「感性の法則」の領域、すなわち理性が「ただ結合だけを認識するところ」とは感性界であり、主著の「アンチノミー」論では、第一のもの、限界等を認めない「反定立」の観点が対応する。したがって、既に見たように『就職論文』で「感性の法則」と見なされた法則は、第一『批判』の二律背反論では、「アンチテーゼ」を主張する理性法則につながると言える。

同様の箇所に付されたメモ書き遺稿には以下のような記述も見られる。「（世界内の）自由と世界に外在する最上原因の絶対的必然性は、力学的理性の諸原理である」（Refl. 5363, XVIII 162; *υ* 1776–78）。ここでの「力学的理性」からは、『純粋理性批判』の「アンチノミー」論で、カントが第一ならびに第二アンチノミーを「数学的」（KrV B 556 / A 528）、第三ならびに第四アンチノミーを「力学的」（ibid.）と名付けていたこと、また後者で主題化される事象連鎖の系列について「力学的系列」（KrV B 558 / A 530）と表現していたことが想起される。因果性の力学的系列の始原に「自由」と原因の「絶対的必然性」を置き、両者を力学的理性の諸原理と名付けることのうちにもまた、第三、第四アンチノミーの主題のもつ共通性が顕現している。「数学的系列」がただ「同種的なものの総合」（KrV B 558 / A 530）だけを許すのに対して、「力学的系列」の特徴はそれが「異種的なもの」の総合を許容することにある[56]。例えば一定量の「空間」や「時間」を単位とし、これが形成する系列を考えるならば、その総合は常に同種的なものの総合となり、総合は原理的に際限なく続きうることになる。これに対して「結果」から「原因」への、そして「偶然的なもの」から「必然的なもの」への遡源については、「異種的なもの」が認められる。例えば木材が火によって燃焼し炭化するとき、炭になった木を結果と見なし、

56）「感性的諸条件の力学的系列はしかしさらに一つの異種的な条件を認める[…]。これは系列の一部ではなく、叡知的なものとして系列の外に置かれる」（KrV B 558 / A 530）。なお、叡知的なものとは、現象するもののもとにあってそれ自身現象することのないものである。以下を参照。KrV B 566 / A 538.

火をその原因と見なすならば、結果と原因は互いにまったく異なる性質のものだと言える。また、植物は一般に水と二酸化炭素と光による「光合成」によって有機物を産み出す。ここで産み出された有機物を結果と、光合成をその原因と見なすならば、結果と原因は明確に異なる種類のものである。結果と原因が同種的ではなく異種的であることは、稀ではないと言えるだろう。ここではこの「異種的なもの」が、結果から原因への遡源の系列の限界に置かれている。ここで限界に置かれる「第一のもの」としての「異種的なもの」の特徴は、それが現象する経験的なものではなく、現象することのないもの、すなわち叡知的なものである点に認められる。また、別のメモ書き遺稿では以下のように述べられている。

> 「偶然的なもののすべての系列は、一つの必然的なものに起因している。このことはしかし、系列の第一項がある、ということを意味するものではない」(Refl. 5364, XVIII 162; *υ* 1776-78)。

偶然的なものはそれ自身偶然的ではない必然的なものを自らの在ることの根拠として求めるが、それは系列のうちなる第一項が存在することを指示するものではなく、それがあるとすれば系列の外部に想定される、ということである。必然的なものは、偶然的なものの構成する系列の外に位置するそれ自身偶然的ではないものに他ならない。この点については『就職論文』での立場と同じである。そこでは次のように述べられていた。「諸々の実体の全体はしたがって偶然的なものの全体である。そして世界はその本質からすると純然たる偶然的なものから成っている。それに加えていかなる必然的実体も、結果したものに対する原因として以外に、世界に連結していない。したがってまた部分として全体に対する自らの補足部分と連結しているのではない」(De mundi § 19, S. 74)。必然的実体は偶然的なものの形成する系列のうちにあるのではなく、それとは異なるものとしてこの系列の外部に位置づけられる。また同じ個所に次のような説明が見られる。「したがって世界の原因は世界に外在する存在者

[…]である」(ibid.)。「第一原因」そして「必然的なもの」と言われるものは、世界内にある何かではなく、世界の外にあるものすなわち「世界に外在するもの」であるとここでは考えられている。同じくバウムガルテンの教科書『形而上学』„§ 381“への書き込みに「第一原因」に関わる次のようなメモ書き遺稿が見られる。

> 「諸現象の系列のうちにはいかなる第一原因もない。というのも、第一原因はただ諸々の物自体にのみ妥当するからである。そこでしかし原因の系列は時間に従属しているのではない」(Refl. 5367, XVIII 162; $\phi^2-\phi$ 1776-89)。

ここには批判期に初めて用いられることになった「物自体 Ding[…] an sich selbst」という表現が見られるので、このメモ書き遺稿は1781年に近い時期ないしそれ以降のものであると思われる[57)]。ここでは空間と時間の次元すなわち現象の次元と、空間と時間の制約を受けない「物自体」の次元の区別が前提され、諸現象の生成する感性界には第一原因がないという理解が改めて確認されている。またこの第一原因は「物自体」、すなわち私たちの認識能力から独立するところに想定される事象にのみ妥当する旨が述べられている。先に「知性的な系列は第一原因をもつ」(Refl. 5361, XVIII 161)と言われ、「理性が原因であるところには、また第一のものが見出される。すなわち自由と最高の存在者が[見出される]」(Refl. 5362, XVIII 162)と言われるとき、そのことで意味されているのはそれらが決して「現象」ではないということである。

同じ個所への書き込み遺稿には次のようなものもある。「始まりは系列に帰属するが、しかし原因は系列に帰属しない。偶然的なものの系列は始まりなしにありうる、すなわち決して空虚な時間が先行することなく、すべての現象が

57)「物自体」に対応する概念を『就職論文』(1770)のうちに探すならば、悟性の認識する「それがあるがままのもの」(De mundi § 4, A 8)がこれに対応するだろう。しかしこの論文では「それがあるがままのもの」はその認識可能性が否定されておらず、感性を介することなしに行われる悟性の活動によって認識されうるものと考えられていたので、その限り両者は同一の概念ではない。

一つの系列のうちに先行的ならびに後続的に規定されている。けれども一つの原因をもちうる」(Refl. 5365, XVIII. 162)。ここに見られるのも偶然的なものの成す系列と、系列全体の原因との区別であり、原因である必然的存在者がこの系列そのものの外部にあるということに他ならない。同様の趣旨は次のメモ書き遺稿のうちにも見られる。

> 「[…]経験的な総合によって私たちはいかなる（絶対的な）全体も考えることができない。しかし純粋に知性的な総合によって一つの全体を考えねばならない。なぜなら、偶然的なものはすべて完全な原因を、なるほど自らのうちにではないが、自らの外部にもつはずだからである。[一つの絶対的な全体について] 私たちはいかなる形象ももたないが、しかし概念をもつ。というのも、無限なものについてはいかなる形象も可能では[…]ないからである。私たちは空虚な空間と空虚な時間のうちに世界の始まりの位置を規定しうるものとして述べることはできない。いかにして何かが時間のうちで端的に始まりうるのか、ましてや、いかにして時間自身がはじまりうるのか[ということについては、述べることができない]」(Refl. 5368, XVIII 163; ϕ^2 1780–89)[58]。

このメモ書き遺稿は先のものと同じくバウムガルテンの『形而上学』„§ 381“ への書き込みであり、先ずはそこで述べられた「無限背進」は不可能であるという世界解釈へのコメントとして読むことができる。そのうえで次のように解釈することができるだろう。ここには、経験的な認識を積み重ねることによっては感性界の全体を把握することができないこと、また形象によって無限な全体を把握することもできないことが一方で、また他方ではしかし概念によって統一体としての全体を考えねばならないことが述べられている。ここでもまた「神の存在証明」の枠組みにより、世界内の事象がすべて偶然的事象であることに基づきその原因であるもの、必然的なものが世界の外部に想定され

58) このメモ書き遺稿は、アディッケスの注記によれば、381節の欄外に、またその中に、書かれている。以下を参照。„Zu und in M § 381“.

るべきだと考えられている。そして後半部では無限なものについて私たちは「形象 Bild」をもつことができないことが述べられている。無限なものについては「無限」という言葉ないし記号によって表現することはできるが、しかしこれを全体として可視化すること、形にすることはできない。「無限」とはまさにこれを全体として把握することができず、何らかの形（あるもの）として提示することはできないがゆえに、無限であると言える。そして、どのようにして時間のうちで何らかの事象が端的に始まりうるのか、という問いのうちに時間に関する世界の起始の問題に触れられており、最後に時間の始まりを問うことを例に思考の限界が提示されている。ここには一方で感性的に世界の全体を鳥瞰することは決してできないにもかかわらず、他方で概念的思考が一つの全体として世界を把握しようとするというある種の相互に矛盾する人間の認識のあり方が素描されている。ここで対立するのは「経験的な総合」（Refl. 5368, XVIII 163）と「純粋に知性的な総合」（ibid.）である。経験は感性的な形式に基づくのでその総合は感性的でもあると考えられる。したがってこの総合は感性的な原理に基づくと見なすことができる。しかしまたこの総合の主体を「力学的理性」（Refl. 5363, XVIII 162）と見なし、この理性が経験のうちに結果から原因へと遡源することで系列の全体を総合すると考えることも可能である。後者のように考えるならば、ここに見られるのは感性の法則と悟性ないし理性の法則の矛盾ではなく、複数の理性法則相互の矛盾である。

これらのメモ書き遺稿はすべてすでに見た講義の教科書『形而上学』中の「宇宙論」の「世界についての否定的な概念」に書き込まれたメモ書きであり、このテーマについてのコメントであると同時に、カント自身の解釈をスケッチするものとして読むことができる。したがってバウムガルテンの観点を確認している部分と、カント自身の観点を示す部分の両方が含まれているはずである。読者には先ずこの二つの観点を区別することが求められるだろう。同じくバウムガルテンの『形而上学』„§ 381“ への書き込みとして残された遺稿に次のものがある。

「すべての現象は自然のうちにある。しかし現象の原因は、現象のうちには含まれておらず、それゆえまた自然ではない」(Refl. 5369, XVIII 163; υ 1776-78)。

このメモ書き遺稿では、現象の原因は現象の領域には見出せず、自然ではないものとして考えられている。この原因を自然を超えたところに、つまり自然な事象連鎖の総体の外部にあるものと見なすならば、この文の主旨は現象と物自体ないし経験的なものと叡知的なものを明確に区別する批判期の観点に近い内容であると言える。この観点に基づき、批判期には例えば次のように言われる。「感性的な制約の力学的系列はしかしさらに、ある同種的ではない制約を許容する。この制約は系列の一部ではなく、ただ叡知的なものとして、系列の外部にある」(KrV B 558 / A 530)。この、系列の外部にある「同種的ではない」制約によって、少なくともいったん系列の遡源は終わることになる。形而上学講義の教科書にみられる「世界に外在する存在者」(BM § 388, S. 210f. / MP 302 / AA XXVIII 325) が、「異種的なもの」(KrV B 558 / A 530) のひとつのモデルであったに違いない。この「世界」を感性的世界とみなし、ここでの「異種的なもの」を感性的な対象とは異なるものと考え、感性界の外に想定する、という思考の枠組みをここに確認することができる。

3.1　70年代のメモ書き遺稿にみる二律背反論の生成とその初期形態

以上の考察から、70年代のカントが「無限背進」をめぐるバウムガルテンのテクストを熟知していたことは間違いない。『形而上学』講義の準備や復習を通じてカントはこのテーマについて自ら繰り返し考えており、自ら自身の世界観を形成する過程のうちに吟味し熟考していたはずである。それでは、世界の始原へ向けての背進は無限であるのか、それとも第一項とともに終了するのかという問いは、『就職論文』(1770) 以降新たな体系を構築する過程で、どのように論じられていたのだろうか。アカデミー版カント全集17巻には編者アディッケスが1775年から77年頃の筆記とみなす一連のメモ書き遺稿がみられ、そこに事象連鎖の無限背進に対するコメントや、後年純粋理性の「アンチノ

ミー」として提示されることになる互いに矛盾する命題のペアがみられる。なお、それらはルドルフ・ライケによるいわゆる「ルーズリーフ」（これらはアディッケスの編集により4756番から4765番に位置する）に含まれている遺稿である。まず、「レフレクシオーン4756番」にみられる世界論について見ることにしたい。ここではまず空間と時間について、『就職論文』での立場から、時間は決して実在的なものではなく、時間のあらゆる部分は再び時間であり、与えられたすべての時間は一つの長大な時間の諸部分である旨が説明されている。これに続いて、「超越論的経験論」という見出しのもとに「(反定立：いかなる〔実体も〕存在せず、〔すべては現象である〕)」と書かれ、その後「１」から「３」の番号が振られた文章が続く。

「１．あるものは実体として、つまり物質として、生成することなく、また消滅することもない。無からは何も生じない、すなわち物質は永遠である[…]なるほど依存的ではあるが。

２．世界のどの状態も帰結である。というのも、変化の継起においてすべては始まりと終わりのうちにあり、両者は原因をもつからである。反定立。というのも第一の始まりというものは決して存在しないだろうからである。

３．すべての現象が一緒になって、一つの世界を構成し、また[…]諸現象は現実の客体に帰属する[…]。原因としての神は世界に帰属しない。なぜなら諸表象と客体との調和によってのみ、諸現象は自らのもとで調和し、統一をうるからである[…]」(Refl. 4756, XVII 702, σ^1 1775–77)。

ここでは先ず、物質としての実体の生成と消滅、そして無からの創造が否定され、物質は常住すると述べられている。これは、始原を認めない点で「アンチノミー」論の「反定立」の側の主張に対応する。ここではまた「物質」が「実体」と見なされており、一方でこれが「生成」も「消滅」もしないが、しかし他方で「依存的である」と言われているので、『純粋理性批判』での実体概念と一致している[59)]。「２」では、事象連鎖の系列が反省され、「反定立

Antithesis」という名称のもとに始原の否定が主張される。「３」では、世界の原因としての「神」が、世界に外在する旨が述べられている。また、この箇所には次のコメントが付記されている。「２．への追加。生起することは一つの根拠をもつ、つまり、生起することは根拠によって、規則にしたがって、規定されている。[…]というのもこの規則なしには、経験の統一は不可能であるから。そこから帰結するのは、世界内では諸現象の継起は始まりをもたないということである。しかし世界自身が始原をもつのかどうかということは、知性概念に帰属する」(ibid.)。ここにもまた、感性の法則と純粋悟性の法則ならびに、それぞれの領域の区別が読み取れる。『就職論文』では、「感性の諸法則にしたがえば[…]系列はすべてその系列自身の指示することのできる始まりをもつ」(De mundi § 28, A 34)、と述べられていたが、ここでは「諸現象の継起は始まりをもたない」とされる。『就職論文』のテーゼは、具体的なそれぞれの系列の始まりは感性的に把握できる領域内に確認できることを意味する。これに対して「２．への追加」は、現象としての事象生起の連鎖は常にすでに始まっているので、経験的にその全体を捉えることはできず、したがって「諸現象の継起」のうちに端的な第一項を認識することはできないと見なすわけである。つまり認識できるすべての「始まり」は、自身よりさらに先なる始まりをもち、したがって端的な始原ではない。ここでの筆記には「反定立」というタームが見られ、批判期の二律背反論を想起させるが、しかし「定立」というタームは見られない。いずれにしても、ここにはまだ定立と反定立のペアや、空間と時間の限界、物質の分割、第一原因としての自由、必然的存在者等といった限定されたテーマはみられず、テーゼは断片的である。次に、同時期のものとされる次のメモ書き遺稿を見ることにしたい。そこには、三組のペア命

59)「どんなに現象が移り変わろうと実体は恒常不変であり、実体の量は自然界において増えもしなければ減りもしない」(KrV B 224 / A 182)。また「実体」は「自然界」すなわち現象する事象のうちに認められるものでありそれ自身現象であって、認識主観との関係性のうちでのみ生成する対象に他ならない。したがって伝統的な実体の定義に見られる「独立自存性」という性格は認められず、認識主観に対して「依存的」である。

題が見られる。

「経験的悟性使用の内在的諸原則：1．現象の合成と分割には限界がない。2．第一根拠ないし第一の始原というものはない。3．すべては可変的であり変動する。それゆえ経験的に偶然的である。なぜなら時間それ自体は必然的であるが、しかしいかなるものも時間に必然的に結びついてはいないからである。
純粋悟性使用の超越的諸原則：1．第一の部分というものがある、すなわち結合の原理としての単純体。あらゆる現象の結合には限界がある。2．絶対的自発性、超越論的自由がある。3．端的に必然的なものがある。すなわち最高の実在性の統一、そこにおいて可能的なもののあらゆる多様は制限されることによって規定されうる。それはちょうど空間における形態やあらゆる現存在が、また時間においてあらゆる状態が規定されうるのと同じである」(Refl. 4757, XVII 703f.; σ 1775–77)。

ここには後年『純粋理性批判』で二律背反命題として提示されるテーゼがスケッチされている。先ず主著での第二アンチノミーが、現象の合成と分割の問題として提示されており、主著にみられる「単純体 das Einfache」というタームがここにも見られる。しかし、世界は空間と時間に関して限界をもつのか、もたないのか、という「第一アンチノミー」の問いは、引用箇所には見られない。ここでの二つ目のテーゼは、自由の問題を扱う「二律背反」に他ならない。否定的な命題にみられる「第一根拠」そして「第一の始原」が、肯定命題にみられる「絶対的自発性」、「超越論的自由」に対応している。そして第三の命題は、決して偶然的でも可変的でもなく、あくまでも必然的であるような存在者をめぐる対立を意味し、主著での第四の二律背反命題に相当する。そして、「経験的な悟性使用の内在的諸原則」と述べられている最初のグループは、可能的経験の内部での悟性概念の使用に関する原則であり、主著での「アンチノミー」の「反定立」に対応している。事象の分割に関する限界ないし最終項は経験のうちには認められず、合成と分割はどこまでも続くような外観をもつ。同様に端的に第一の根拠や起始は経験のうちにはみられず、また必然的存在者も経験

的には確認することができない。これに対して「純粋悟性使用の超越的諸原則」と題されたグループの命題は、『純粋理性批判』での二律背反論の定立命題に相当し、可能的経験の枠内に留まるものではなくこの領域の全体を指し示そうとしており、そのために経験のうちには認めることのできない「第一の部分」を置こうとする合理論の立場を示している。これを承けて、さらに以下のような記述がみられる。

> 「反定立論の根拠ないしは純粋理性の外見上のアンチノミー。前者[…]は諸現象の提示する諸原理であり、後者は純粋理性の自発性の諸原理である」(Refl. 4757, XVII 704)。

ここでの記述が先の三種のペア・テーゼへの説明であるとするならば、先の「経験的悟性使用の内在的諸原則」が「諸現象の提示する諸原理」に、そして「純粋悟性使用の超越的諸原則」がここでの「純粋理性の自発性の諸原理」に対応する。そして、前者は主著での「アンチノミー」の「反定立」、後者は「定立」に対応している。ここでは、空間と時間に関する二律背反命題がまだまったく提示されていない。またそれぞれの命題に関する「証明」ならびに「註」にあたる説明もみられない。したがってただ三つの「アンチノミー」のペア命題がスケッチされているに止まるわけだ。しかし、ここには「アンチノミー Antinomie」そして「反定立論 Antithetik」という主著での用語がみられ、「アンチノミー」というカントの専門用語の生成過程が『純粋理性批判』での「二律背反」論に近づいていることが推測できる。そして、同じ時期のメモとみなされている次の遺稿には、対立する命題が四組みられ、主著でのアンチノミー命題にさらに接近している。

> 「…(現象の統一と理性の統一)現象を定位する諸原理は、現象をすべて制約されたものとして前提する、すなわちいかなるものも端的に与えられてはいない。
> 1. 合成の…いかなる絶対的全体性もない、すなわち…前進は無限[である]。…

2．いかなる分解の絶対的全体性もない、すなわち無制約的な単純体はない。（絶対的単純体はない。）（無限の前進は把握できない。また無制約者は直観可能とはならない。） 3．いかなる産出の系列の絶対的全体性もない、いかなる無制約的な自発性もない。（いかなる絶対的原因性もない。） 4．いかなる無制約的な必然性もない。すべての事象は時間と空間からえられる。（いかなる絶対的必然性もない。）これらすべての命題は経験的使用の原則としては確かなものである。しかし理性には矛盾する。…合理性の諸原理ないしは理解。一般的なものから特殊なものへ：絶対的総合。1．（依存的なもの）すべての無制約的な全体。世界の始原…。2．無制約的な単純体（モナス）。3．行為の無制約的な自発性（超越論的自由）。4．無制約的に必然的な現存在（原初の絶対的必然性）…。これらの命題は、認識の全体に関する理性使用の原理としては、主観的に必然的である…」（Refl. 4759, XVII 709f.; σ1775-77）。

先の遺稿と異なりここには主著でのアンチノミー論の四種の対立命題が出揃っている。ただし、第一のペア命題については、世界の「全体」について考える際に生じる二律背反命題が吟味されてはいるが、未だ「空間」そして「時間」に関する全体として主題化されてはおらず、事象の「合成」、「依存的なもの」の全体、世界の「起始」等と表現されているに止まる。事象の合成の全体ないし依存的なものの全体は、その内容に即するならば、空間の全体を意味し、世界の始原は、時間に関する世界の始原に連なる。『純粋理性批判』での「第一アンチノミー」については、他の三種の二律背反命題に比して遅れて仕上げられることになったようである。

アディッケスの年代推定が正しければ、カントは70年代の後半、1775年頃から77年頃の間に純粋理性の二律背反論を、その形式に関してほぼ仕上げていたことになる。事象を合成することでえられるはずの「全体性」は、経験のうちには見出すことができない。単純体、モナドもまた時間と空間により成る領域にはみられない。そして無制約的な自発性もまた、経験の領域には決して見出すことができない。無制約的な必然性についても同様である。ここでは自由概

念を扱う脈絡で「産出の系列」という表現がみられ、自由ないし絶対的自発性が行為をそのつど産み出すと考えられている[60)]。またこの行為を産出するものが原因であり、産出された状態が結果であると見なすことができるだろう。ここには後年、行為を産み出す実践理性のもとに認められる「理性の因果性」（KrV B 831 / A 803）の初期形態を読み取ることができる。そして必然的な現存在については第四アンチノミーの定立命題と同様、偶然的存在者の充足根拠となるものとして想定されている。「合理性の諸原理」は無制約的な第一の項を求め、その項とともに絶対的な総合を成就しようとする。この思考の枠組みはそのまま『純粋理性批判』の二律背反論で再現され、そこで純粋理性の法則相互の矛盾として提示されることになる。経験に先立ち経験そのものの可能性の制約となる要因を空間、時間そして純粋悟性概念のうちに求め、それらが感性を触発するものに対して働きかけることを通じて対象世界が生成すると考えるのが、批判哲学の基本的立場である。またこのような制約のもとに成立する世界は、決してこの制約から独立にあるものではなく、あくまでもこの制約のもとに生じる事象の総体であるに止まる。私たちがそこに自らを見出し、日々経験を重ねるこの世界は、認識主観である私たち自身の能力に相即的に現われる限りでの諸々の事象から成るものであり、それら事象の相互関係の総体であって、この認識主観との関係性を離れたところにあるものではない。このように考えるのがカントの観念論であり批判哲学の立場である。以上にみた「アンチノミー」論のスケッチにカント固有の超越論的観念論が次第に形成されていく過程を読み取ることができるだろう。

参考文献

Al-Azm, Sadik J. : *The origins of Kants arguments in the antinomies*, Oxford 1972.

Baumeister, Friedrich Christian : *Institutiones metaphysicae*..., Wittenberg u. Zerbst 1738, Neudruck, Hildesheim 1988.

Baumgarten, Alexander Gottlieb : *Metaphysica*（BM）, Halle ^{4}1757（^{1}1739）Lat. u. dt.

60）『純粋理性批判』には、「理性自身は行為を産出する原因」であるという表現がみられる（KrV B 578 / A 550）。

übers. von G. Gawlick u. L. Kreimendahl, Stuttgart–Bad Cannstatt 2011.

Ders. : *Philosophia generalis*, hrsg. von J. Chr. Foerster, Halle 1770.

Crusius, Christian August: *Anweisung, vernünftig zu leben, Darinnen nach Erklärung der Natur des menschlichen Willens, die natürlichen Pflichten und allgemeinen Klugheitslehren im richtigen Zusammenhange vorgetragen werden* (Anw), Leipzig 1744, Neudruck, Hildesheim 1969.

Ders. : *Ausfürliche Abhandlung von dem rechten Gebrauch und der Einschränkung des sogenannten Satzes vom zureichenden oder besser determinierenden Grunde.* Aus dem Lateinischen übersetzt und mit Anmerkungen nebst einem Anhange begleitet M. Christian Friedrich Krausen [Leipzig 1744]; bey dieser zwoten Ausgabe [...] von Christian Friedrich Pezold (De usu) Leipzig 1766.

Ders. : *Entwurf der nothwendigen Vernunft–Wahrheiten, wiefern sie den zufälligen entgegen gesetzt werden* (Ent), Leipzig 1745, Neudruck, Hildesheim 1964.

Des Herrn Doct. u. Prof. Langens oder: Der Theologischen Fakultaet zu Halle. Anmerkungen über des Herrn Hoff–Rats u. Prof. Christian Wolffens Metaphysicum... (KV), Cassel 1724, in: Wolff Werke I. Bd. 17, Hildesheim 1980.

Gottsched, Johann Christoph: *Erste Gründe der gesammten Weltweisheit, darinn alle philosophische Wissenschaften, in ihrer natürlichen Verknüpfung, in zween Theilen abgehandelt werden* [...] 2 Bde., Leipzig ^{7}1762 (^{1}1733 erster Teil/ ^{1}1734 zweiter Teil), Neudruck, Hildesheim u. a. 1983.

Heimsoeth, Heinz: „Atom, Seele, Monade. Historische Ursprünge und Hintergründe von Kants Antinomie der Teilung“, in: ders., *Studien zur Philosophie Immanuel Kants II*, Bonn 1970.

Ders. : „Zum kosomologischen Ursprung der Kantischen Freiheitsantinomie“, in ders.: *Studien zur Philosophie Immanuel Kants II* (Kant–Studien Ergänzungshäfte nr. 100) Bonn 1970.

Hinske, Norbert: Artikel „Antinomie“ in: *Historisches Wörterbuh der Philosophie*, hrsg. von Joachim Ritter, Bd. 1, Darmstadt 1971, Sp. 393–396.

Ders. : „Kants Begriff der Antinomie und die Etappen seiner Ausarbeitung“, in: *Kant–Studien* 56 (1966), S. 485–496.

Ders. : „Kants Begriff der Antithetik und seine Herkunft aus der protestantischen Kontroverstheologie des 17. Und 18. Jahrhunderts. Über eine unbekannt gebliebene Quelle der Kantischen Antinomienlehre“, in: *Archiv für Begriffsgeschichte* 16 (1972), S. 48–59.

Ders. : *Kants Weg zur Transzendentalphilosophie. Der dreißigjährige Kant*, Stuttgart, Berlin, Köln, Mainz 1970.

Kant, Immanuel: *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis* (De mundi), Königsberg 1770, in: W. Weischedel, hrsg., *Immanuel Kant Werke in sechs Bänden*, Drmstadt 1956, Bd. III.

Ders. : *Immanuel Kants Vorlesungen über die Metaphysik…* hrsg. von K.H. Pölitz (MPöl), Erfurt 1821, Neudruck, Darmstadt 1988.

Ders. : *Kritik der reinen Vernunft* (KrV), Riga [2]1787 ([1]1781), Neudruck, in: Weischedel, ibid., Bd. II.

Ders. : *Kants Gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften (und ihren Nachfolgern), Berlin 1900ff.

Ders. : *Principiorum primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio* (ND), Königsberg 1755, in: Weischedel, ibid., Bd I.

Kreimendahl, Lothar : *Kant – Der Durchbruch von 1769*, Köln 1990.

Leibniz, Gottfried Wilhelm : *Monadologie* (Mon), übers. von A. Buchenau… hrsg. von H. Herring, Hamburg [2]1982 ([1]1956).

Ludovici, Carl Günther : *Ausführlicher Entwurf einer vollständigen Historie der Wolffischen Philosophie*, 3 Bde., Leipzig 1738, Neudruck, Hildesheim u. a. 1977.

Meier, Georg Friedrich : *Metaphysik. Zweiter Theil, Cosmologie* (MMC), Halle [2]1765 ([1]1756), Neudruck, Hildesheim u. a. 2007.

Meißner, Heirich Adam : *Philosophisches Lexicon, darinnen die Erklärungen und Beschreibungen aus des salu. tit. tot. Hochberühmten Welt-Weisen, Herrn Christian Wolffens*, *sämtlichen teutschen Schriften…*, Bayreuth u. Hof 1737, Neudruck, Düsseldorf 1970.

Reich, Kraus : „Einleitung“ zu Kant, *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis*, Hamburg 1958.

Spiniza, Benedictus de : *Ethica ordine geometrico demonstrata*, hrsg. von Konrat Blumenstock (SE), Darmstadt 1989.

Walch, Johann Georg : *Philosophisches Lexicon*, 2 Bde., Leipzig [4] 1775 ([1]1726) Neudruck, Hildesheim 1968.

Warda, Arthur : *Immanuel Kants Bücher*, Berlin 1922.

Wolff, Christian : *Oratio de sinarum philosophia practica*, übers. u. hrsg., Michael Albrecht, Hamburg 1985.

Ders. : *Vernünftige Gedanken von den Kräften des menschlichen Verstandes und ihrem richtigen Gebrauche in Erkenntnis der Wahrheit* (DL), Halle 1713, hrsg. u. bearb. von Hans Werner Arndt, Hildesheim u. a.1978.

Ders. : *Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt* (DM), Halle [11]1751 ([1]1719), Neudruck, Hildesheim u.a. 1983.

Zedler, Johann Heinrich: *Grosses vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste* […] 64 Bde., Halle u. Leipzig 1732–1750, Neudruck, Graz 1961–1965.

邦語文献

河村克俊「前批判期カントの自由概念 ― 発展史的考察 ―」関西学院大学法学部外国語研究室『外国語外国文化研究』XVII 2017年 3 月、pp. 47-98。

増山浩人『カントの世界論　バウムガルテンとヒュームに対する応答』北海道大学出版会 2015年。

ノルベルト・ヒンスケ「カントに於ける矛盾論の概念と、その十七、十八世紀プロテスタント論争神学からの由来― カント二律背反論の未だ気づかれざる起源について―」（河村克俊訳）関西学院大学『哲学研究年報』第34輯　2000年、pp. 91-111。

山本道雄『ドイツ啓蒙の哲学者　クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記』晃洋書房 2016年。